



かわいい教え子が

あられもない姿で受ける

# 発育感覚検査

優等生女子が

引き受けてしまった

謎の研究調査とは・・・

本編314枚

「お久しぶりです、教授。」

わざわざこちらまでいらっしゃるなんて」

「ああ。で、どうだい？ 新しい職場は？」



「悪くないですけど、正直、退屈です」

教授と呼ばれた男は軽く頷きながら、  
吉良をじっと見つめた。



「研究が恋しいか」

「ええ…やっぱり、あの頃が一番充実していました。  
倫理的に問題視されてしまったけど、  
私は今でも自分の方法が間違っていたとは思っていません」



「まあ、君らしいと言えば君らしいな。  
…そんな君に頼みがあつてきたんだ」

「あら、また何か面白い研究でも？」

「ああ、今回も少し…慎重を要する内容だね」

男は分厚い書類を机の上に置き、軽く叩いた。



「…正直、私が直接手を出すのはリスクが高い。」

「ええ。でも、良い研究には  
多少のリスクはつきものです。」

「うまくやってくれるか？」

吉良はすぐにあっけらかんと笑った。

「もちろん。内密に進めますよ」

「内密に・・・ああ、それがいい。」

それから、協力者もいた方がいいかもしれん」



「お任せください。適任の生徒も・・・  
そして助手も。心当たりがあります」

そう言うと、吉良は書類を手に取り  
満足そうに微笑んだ。





「この問題、  
今日習った公式を応用すれば解ける問題なんだ。  
…誰か分かる人？」

俺は黒板の前に立ちながら、教室を見回した。

昼食後、眠気に襲われるこの時間帯は、  
いつものことながら誰も反応しない。

「ちょっと難しいかな…」

俺は後ろ手に白いチョークを掴み取る。

生徒たちはほぼ全員、  
机に視線を落としている。

仕方ない。

答えを書こうと黒板に手を伸ばした、

その瞬間――

「…あ、はい！先生、わかりました！」

声のする方へ振り向くと、  
一人の生徒がキラキラした瞳で手を挙げていた。

「お、じゃあ書いてみて」



黒板の前に出て来させ、式を書くよう促す。

生徒は迷いなく、綺麗な字で、  
すらすらと解答を書き始めた。



「おお…正解！すごいな！」

正直、解ける生徒がいるとは思ってなかった。  
しかもこんなに完璧に…。



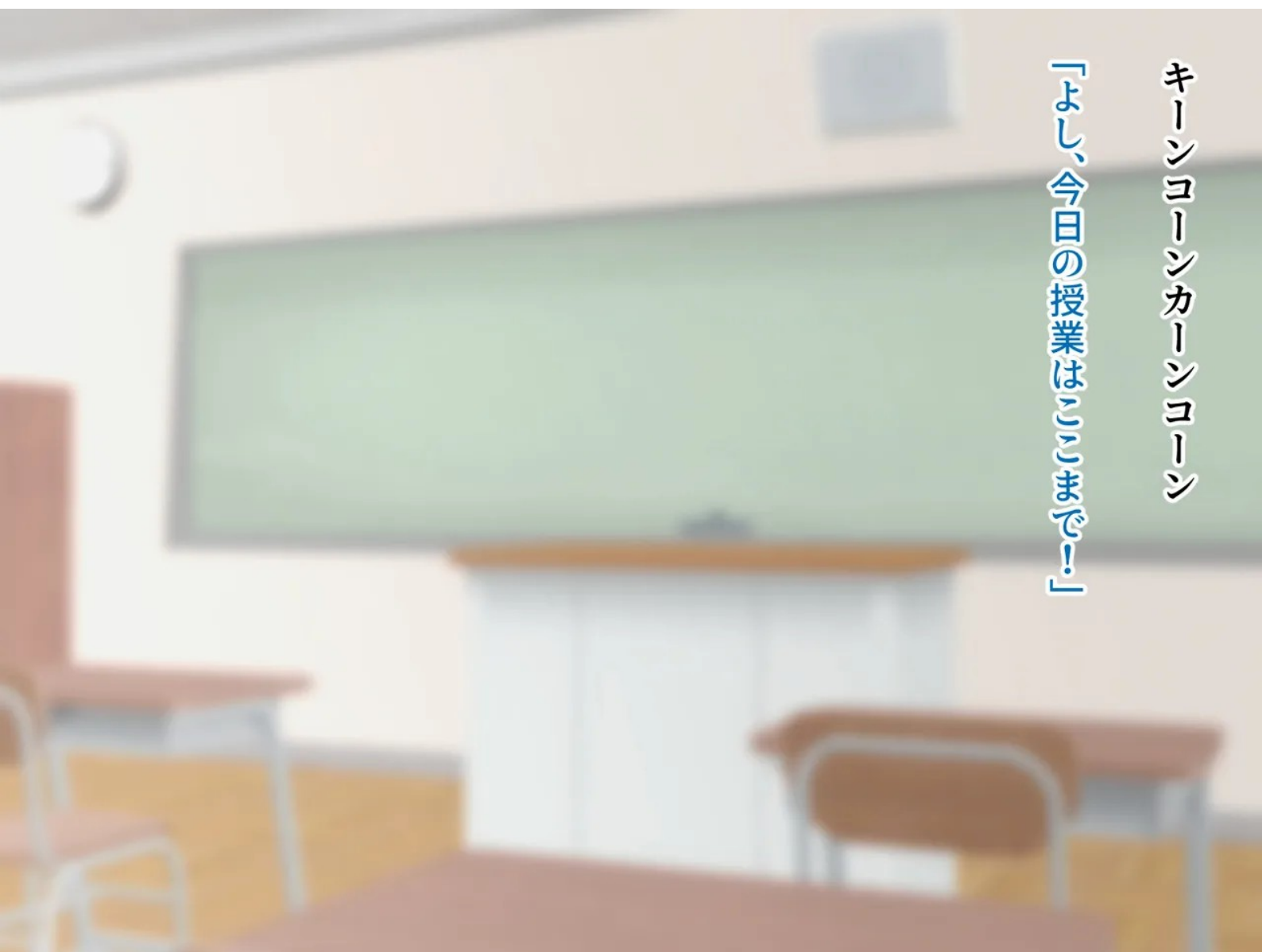
他の生徒たちからも感嘆の声が広がり、  
どんよりしていた教室の空気が一変する。

（やっぱり、藍田さんか…）

（ほんと、すごいよな…）

キーンコーンカーンコーン

「よし、今日の授業はここまでー!」





「藍田」

俺は凜とした後ろ姿に声をかけた。



「…先生」

振り向いたのは、  
見とれてしまうほどの端麗な顔立ち。

うちの学年トップの優等生、藍田せりかだ。





「さっきの問題分かったの、  
他のクラスも含めて藍田だけだったよ」

「え、そうなんですか？」

「…たまたま、ピンときただけです」

そう言いながら、

照れたような笑みを浮かべる藍田。

俺は子供には興味ない。  
だけど、藍田はちよつと違った。

まるで朝ドラのヒロインに  
大抜擢されてもおかしくない可愛さで

すらっとした立ち姿、  
どこか大人びた振る舞い。

そしてなにより・・・





この豊満な胸。

いつも俺の理性を試すかの如く、  
圧倒的な存在感を放っているのだ……！







将来モノにできる男が羨ましすぎるよ……

そんなことをうっすら思い浮かべながら、  
俺は一枚のプリントを藍田に手渡した。

養護教諭の吉良先生から頼まれていたものだ。



「これに記入して、今日の放課後、保健室に来るようになって」

「…あ、あの

どこかの大学の研究協力の話ですよね？」

「ああ、たぶんそれだ。

そうか、もう聞いているのか」

「はい。私、保健委員長ですから！  
吉良先生とは仲良しなんですよ」



藍田は長いまつ毛を伏せて、  
プリントを読み始めた。

「研究協力同意書…？ うーん…」

藍田の表情が一瞬で曇る。

「これ、よくわからないんですよね。  
結局、研究協力って何をするんですか？  
それに私、放課後は部活もあるし…」





「さあ、詳しいことは俺も知らないけど…  
吉良先生からちゃんと説明があると思うし。  
部活も大丈夫。  
顧問の先生には話しておくから」

「えっ、でも  
来月コンクールなんですよ。  
練習しなくちゃいけないのに…」

「うーんまあ、今日だけだしさ、頼むよ」



藍田は少しむず痒そうな顔で  
考え込んでいたが、やがてしぶしぶ頷いた。

「…わかりました」

しっかり者の藍田は  
生徒からも教員からも頼られることが多いが、  
押しに弱いところは玉にキズだ。





「すぐに、終わりますよね？」

「すぐかどうかはわからないけど……」

「……………」

藍田は不服そうに眉をひそめている。

「・・・内申点は最大限盛っておくからさ！」

「・・・もう、そういうこと  
言うのやめてくださいっ！」





放課後の職員室



はー、やれやれだ。

まったく、教師ってのは  
なんて大変な仕事なんだ？

俺は目の前の答案用紙の山を見つめて嘆いた。

生徒たちと過ごす時間はもちろん楽しいが、  
作業量がぜんぜん割に合わない。

俺なんてまだマシな方だ。

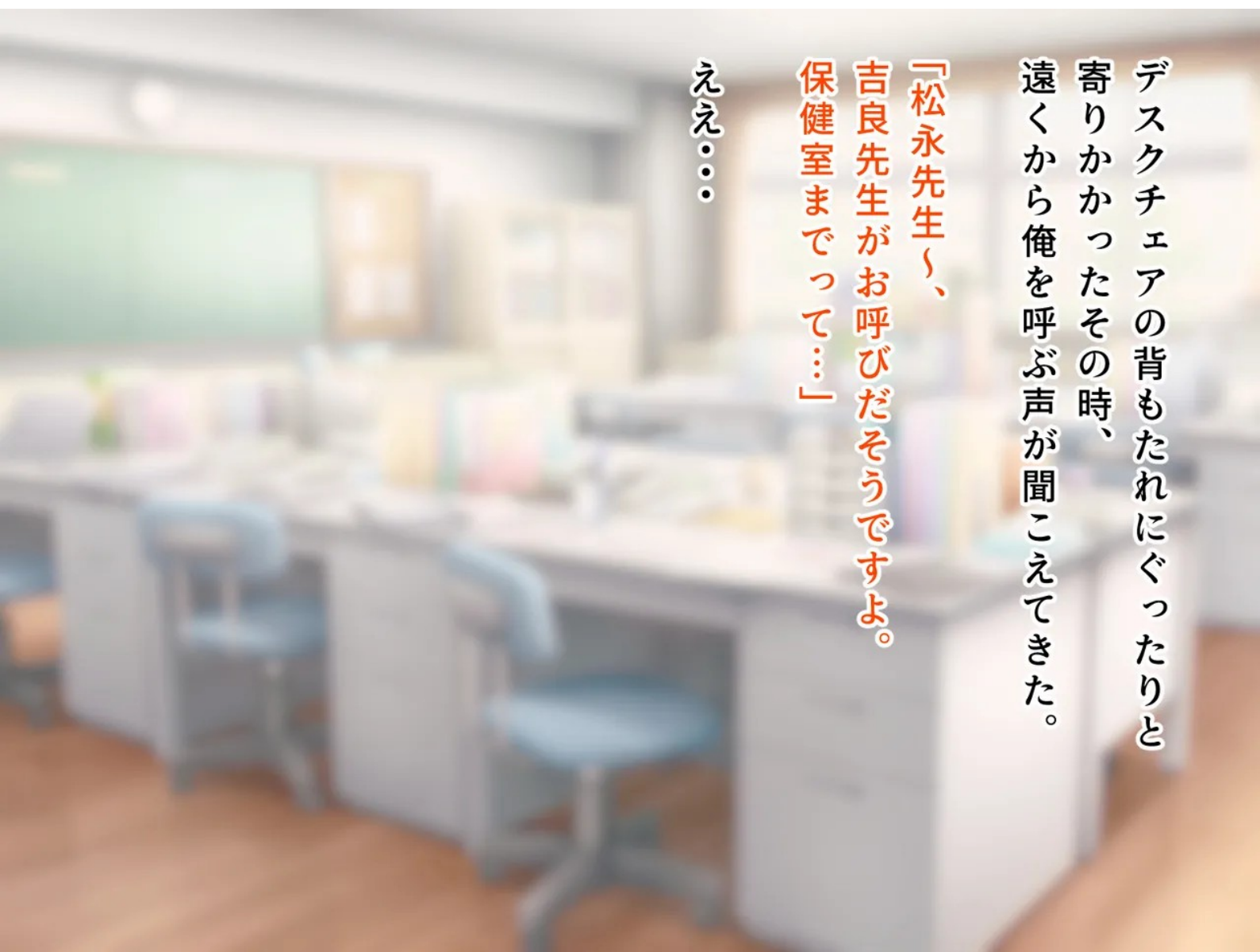
部活の顧問をやってる先生方には  
頭が上がらない。

はあ：今日は早く帰れるんだろうか。

デスクチェアの背もたれにぐったりと  
寄りかかったその時、  
遠くから俺を呼ぶ声が聞こえてきた。

「松永先生、  
吉良先生が呼びだそうですよ。  
保健室までって…」

ええ…





なぜか保健室に呼び出される俺。

保健室のドアを開けると、

涼しい空気とほのかな消毒液の香りが漂ってきた。

久しぶりに入るが、中は結構広い。

ベッドや設備も充実しているし。

奥の方には

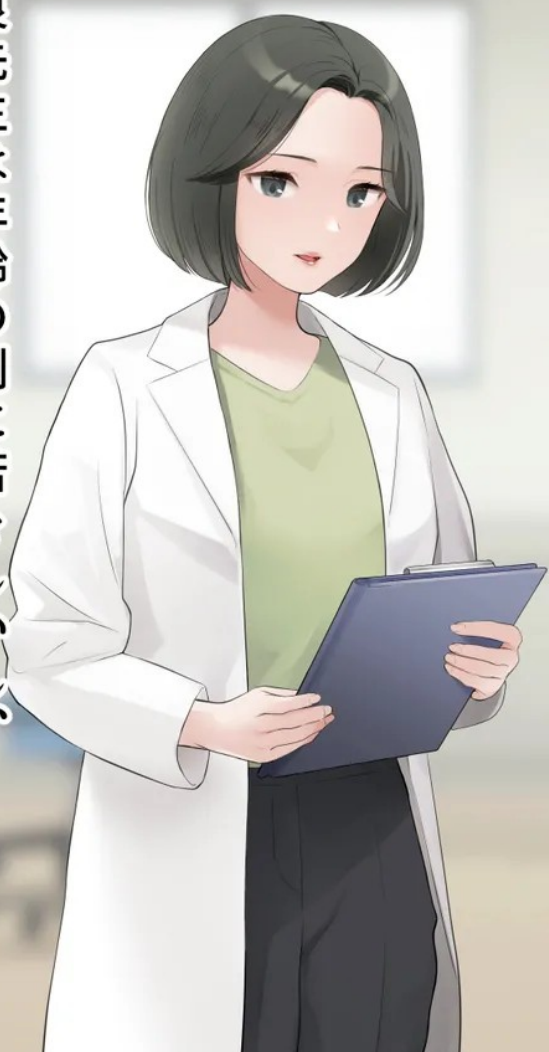
デスクの椅子に座る養護教諭の吉良先生と、

それに向き合うように

ちょこんと腰掛ける藍田の姿があった。

「あら、松永先生。  
急に呼び出して、ごめんなさいね」

俺に気づくなり椅子から立ち上がる吉良先生。



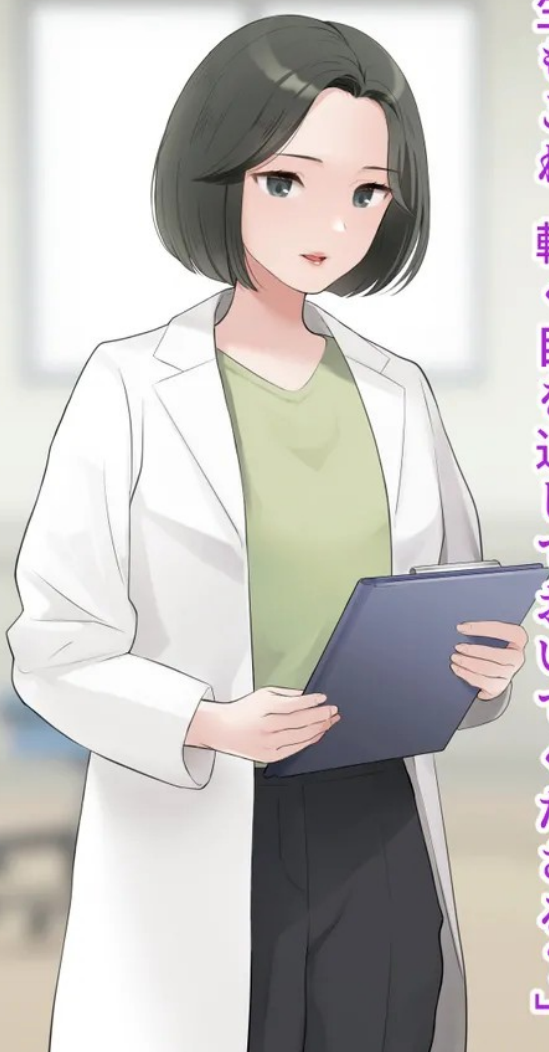
吉良先生は年齢の割に若々しいし、  
よく見れば顔は美人。

だが、表情が乏しくて  
何を考えているのか分からない。

感情が読めないから、俺は少しだけ苦手だ。

吉良先生は机に広げられた  
大量の書類の中から、  
ホッチキスで纏められた一冊を俺に渡した。

「ちょうど今、藍田さんに  
調査の目的について説明していたの。  
先生もこれ、軽く目を通しておいでくださる？」



軽く目を通すって、これ何ページあるんだ。

「はあ。

えっと……青少年健康調査協力のご依頼……」



有名医科大学の名が記された依頼書には、  
一瞬で読む気が失せるほど  
細かい字がぎっしり並んでいる。

青少年の身体的および精神的成長過程に関する  
多角的なデータ収集を行うことにより得られる  
統計的知見を基盤とし将来的な健康リスクの予測  
およびそれに基づく予防策の策定、  
さらに特定の年代に応じた成長の指標を確立する  
ことを通じ医療ならびに教育現場においての…

ああ、もう限界だ。

吉良先生は優しく藍田に向き直った。

「……と、そういうわけだから」

「これはとっても大掛かりな  
極秘研究プロジェクトだそうなの」

「うちの学校からでもできるだけたくさんの  
データを集めたいのだけど、  
希望者がまだ一人もいなくてね」



「検査項目が多くて大変だけど、協力お願いできるかしら？」

「はい。ぜひ、協力したいです！」

藍田は目を輝かせながら笑顔を見せている。

あ、あれ。随分前向きだな。

昼に話した時とはずいぶん様子が違うようだが・・・





「その大学、昔からの憧れなんです」

ああ、そうだった。

この医科大学は藍田の志望校だ。

「藍田さんならそう言ってくれると思ったの。  
ありがとう、助かるわ」

そういつて二人は微笑み合った。

藍田が吉良先生とは仲良しって言ってたけど、  
どうやらほんとうらしい。



「それで先生、  
調査ってどんなことをするんですか？」

「うーん一つ一つは簡単なものよ。  
先生に任せてくれれば大丈夫。  
痛いこともしないから安心してね」

藍田は一瞬考えるような表情を浮かべたが、  
「分かりました」と小さく頷いた



「それじゃ、  
この研究協力同意書に名前を書いて」



藍田に同意書が挟まれたクリップボードと  
ペンを渡すと、  
吉良先生は俺の方に向き直った。



「実は、この調査には松永先生にも手伝ってほしいと思っているのだけど……」

う。なんだか面倒な予感がする。

「……手伝い、ですか」

「そうよ」

「えっと、具体的には何を……」

「とにかくほら、この有様でしょう。私も一杯一杯でね」

吉良先生が視線を送った先のデスクには、検査のための大量の資料が混ざり合い、山積みになっていた。



「検査項目が多くて、一人ではとても無理なの。  
ほら、松永先生は藍田さんの担任でしょう？  
だから何かと、頼むわね」

吉良先生は一方的にそう言い放って、  
デスクの上の小難しそうな資料を  
せっせと読み始めた。



急に呼び出されて、何かと思ったら  
そういうことか。

俺だって、  
まだ片付けてない仕事があるんだが。

でもまあ・・・藍田も乗り気になっているし。

藍田には面倒事を押し付けておいて、自分だけ逃れようというわけにもな。

それに藍田といれるのは、悪くない。目の保養ってやつだ。

俺はもう一度、

藍田の整った横顔をちらりと見て、少し気を楽にした。

今日も遅くなりそうだが  
そこまで悪い日じゃない・・・かもな。





藍田が同意書を書き終えると、  
吉良先生はすぐに確認、回収した。

「じゃあ早速。始めましょうか」

吉良先生の声に、  
藍田は自然と座り直し姿勢を正す。



その真面目な表情に、  
俺も何だか引き締まる気持ちになる。

「改めて、二人ともご協力ありがとう。」

さて、さっきも言った通り、

これは極秘案件だからまだ誰にも言えないの。

藍田さんも松永先生も、

これから行う調査の内容については  
くれぐれも外部に漏らさないよう、気をつけてね」



「…はい。分かりました」



吉良先生は検査の記録用紙を挟んだクリップボードを手にした。

「では、まずは簡単な問診から。」

まず生活習慣についてです。  
規則正しい生活を送れていますか？」

「はい」

「体調面で何か気になることは？」

「気になること……特にはありません」



「睡眠はしっかりとれてる？」

「はい、毎日7時間くらい寝れています」

吉良先生はうんうんと頷きながらメモを取る。

「食事はどうかしら？  
バランスの取れた食事、できてる？」

「はい。お野菜もフルーツも好きで  
よく食べていますし：：タンパク質も  
しっかり摂るようにしています」



「あら、藍田さんの年齢でそこまで食生活に  
気が配れているなんて立派だね」

「そうですか？ ありがとうございますっ」

吉良先生が嬉しそうにそう言うと、  
藍田もつられて笑顔を見せた。





「お通じは順調？ 便秘とかはしてない？」

「……はい。大丈夫、だと思っています」

「毎日出てる？」

「……っ」

藍田は一瞬驚いたような顔をして、  
困ったような笑みを浮かべた。



「えっと、毎日は・・・」

「あら、そうなの？ 何日に一回？」

「……………」

「毎日出ないなら、ちょっと心配よ」

藍田は少しだけ口籠ると  
目を伏せながら小さな声で答えた。



「ふ、二日に一回くらいでしょうか……」

「なるほどね、量はどうかしら？  
一回の排泄でどのくらい出てる？」

「えっ……えっと……」

こ、こんなことまで聞くのか。

ただでさえ答えづらいのに  
俺もみているし、そりゃ躊躇するだろう。



でも、ちよつと恥ずかしそうに戸惑う  
藍田も可愛い。



藍田は顔を赤らめ、か細い声で呟いた。

「・・・普通くらい、だと、思います・・・」

「ん？」

あまりの声の小ささに吉良先生が聞き返す。

「二回の排泄量は多かったですか？」

「い、いえ・・・」



吉良先生はやや首をかしげながら  
あっけらかんとした態度だ。

「。。。とりあえず、便秘の疑いあり、と。  
えーと、そうすると。。。」

おしっこは問題なさそうかな？」

「えっ？ えっ、と。。。」

「おしっこの回数や量、色とか、匂いとか」



「・・・急に聞かれても、難しいかな」

吉良先生はクリップボードのリストをめぐりながらぼそぼそと独り言のように呟く。

「まあどうせあとで、これと・・・ああ、そうだ、後でこれも・・・」



吉良先生の呟きを聞きながら、藍田は不安げな表情を浮かべている。



「いいわ。次に、月経についての質問です。  
最後に生理が来たのはいつかしら？」

「……」

藍田は少しだけ俺の方を意識した様子で  
気まずそうに視線を動かす。

「えっと、二週間くらい前、です」

「生理の悩みはある？量が多かったり、  
生理痛とか」

「…あります。お腹が痛くなったり……」



「初潮は何歳の時？」

「え、えつと……12歳の頃です」

「性交の経験はありますか？」

「な……な、ないです！」

藍田はちよつと慌てたように否定した。  
まあ、この慌てっぷりは本当だろうな。



しかしさつきから際どい問診が続く。  
聞いちゃいけないことを  
盗み聞きしているような気持ちになるな。



「わかりました。他になにか身体の  
発達ことで気になることはありますか？」

「は、発達……？」

「ええ。たとえば、乳房の張りとか痛みとか。

見たところ藍田さんはとても胸が大きい  
ようだけれど……」

「えっ……」





「そ、そ、そんなこと…っ」

藍田は明らかに顔を赤らめ狼狽しながら、  
ちらりと伺うように俺の方を見た。

その様子を見た吉良先生はハツとした顔をする。



「ふふ、なに？ あなたさっきから  
松永先生を気にしているの？」

「そ、そういうわけじゃ……」

沈黙する二人。

吉良先生は相変わらず淡々とした表情だが、  
藍田は気まずそうに俯くばかり。



無理もない。  
男が立ち入っちゃいけない話題が多過ぎる……

「あの。吉良先生、僕、いない方が  
良さそうですね？」

ずっと聞いていてもいいのだが、  
ちよつとだけ藍田が気の毒だ。

「いえ、松永先生にはいていただかないと。  
他の先生も忙しくしてらっしゃるでしょうし」



「あゝなら僕、聞いてきましようか？  
木村先生とか、山田先生もお願いできる  
かもしれないな」

「いえ、もうそのお二方には断られてしまった  
の。。。ほら、部活の顧問があるでしょう」

そ、そうか。  
それなら、まあ、しょうがないか・・・



「藍田さんは松永先生のことは信頼しているでしょうし、何も問題ないわ」

吉良先生は藍田にまっすぐ向き直った。

「そういうわけだから、いいわよね？ 藍田さん。生徒の健康を気に掛けるのも彼の仕事のひとつだし、ね」

「……………はい」

藍田は不安げな表情のままだったがコクリと頷いてくれた。



「問診はひとまずここまで。  
では、次に進みましょう」

張り詰めた空気を変えるように、  
吉良先生は少し声を張って  
藍田に微笑を向けた。



「それじゃ早速、調査に移ります。

まずは乳房発育の調査、ね」

「えっ……」

……にゅ、にゅうぼう？  
俺は生唾を飲み込んだ。





「えっと。ブラウスとキャミソールや  
ブラジャーも全て外してね。  
乳房の観察をするから」

「……!!!」

藍田の顔がかーっと赤くなる。

「大丈夫、私たちしかいないし、安心していいわ」

そう言いながら吉良先生は  
保健室のカーテンをサーっと閉めた。

私たちしかって……  
俺も含まれていいのか?!



藍田は俺をちらりと見た。  
すぐに目をそらし、シャツの裾をぎゅっと  
握りしめる。

「で、できません……」

「あらあんなに、協力したいって  
言ってくれてたじゃない。」

「で、でも……そんな、ぬ、脱ぐなんて……」



「脱がないと始まらないでしょ。」

思春期の身体発育と  
皮膚感覚の関連についての研究なんだから」

—  
!?

「!・・・そ、そんな・・・!」

「そんなって・・・  
さっき資料は渡したはずだけど」

「・・・」





いつも冷静な藍田だが、  
憧れの大学名を耳にしてつい嬉しくなり、  
資料を読み込まずに安請け合いしたのだろう。

といってもかなりの枚数だったので、  
急に読めと言われても酷な話なのだが：

「みんなの健康のための大事な調査なの。  
恥ずかしいなんて思わないで欲しいわ」



「.....」

いつも軽快に話す藍田が、言葉に詰まる様子を見るのは初めてだ。

「ほら、藍田さん早くしましょう。松永先生もお忙しいんだから」

吉良先生は藍田に近寄ると、「ちよっと手伝うわね」と制服のリボンのゴムを緩めた。



そして首元のボタンから一つ一つ外していく。

「あっ……」

されるがままに固まる藍田は、  
視線を泳がせ、顔をさらに赤く染めた。

吉良先生が最後のボタンを外し終わると、  
シャツがゆっくりと開かれ  
藍田の豊かな谷間が顔を覗かせた。







吉良先生はそつとシャツを肩から滑らせ  
袖を丁寧に抜き取ると、  
キャミソールも手早く脱がせてしまった。

「…………っ!!」

「だめ、隠さないの。手は横に気をつけ」





「胸が膨らんできたのは何歳の頃？」

「……っ」

「ちよつと。」

「答えてくれないと」

吉良先生がクリップボードを  
トントんと叩きながら急かす。



「……10歳くらいです……」

俯きながら小さな声で答える藍田。



「ほら、大丈夫だから、リラックス。  
深呼吸してみて」

藍田は固く結んでいた口元を少し緩め  
深く息を吸った。

胸元が大きく上下する。

「もしかして、大きいのを気にしているの？」

「……………」

藍田は頷きさえしなかったが、  
否定もしなかった。



「気にすることないのよ。

体型はみんな違って当たり前。  
周りとは比べることないわ」

「…………っ」

「さ、少しは落ち着いた？  
ブラも取らせてね」



吉良先生は藍田の背中に手を回し、  
ブラのホックに指を掛けた。

「…あっ」

藍田は背を丸めて小さくなる。

「ブ、ブラしたままじゃダメ、ですか？」

藍田は泣きそうな声で訴えた。

「だめよ。直接見なくては話にならないわ」





ごめんね、と言いながら藍田の背中に  
手を回しブラのホックを外す吉良先生。

「背筋を伸ばして。  
ほら、大丈夫だから自信をもって」

吉良先生はそう言って、  
すかさずブラを剥ぎ取った。





目の前の光景に、ただただ圧倒される。

年齢の割に垂れ下がった胸。  
ぷっくり膨らんだデカめの乳輪。



優等生です、みたいな顔をして  
なんてけしからん身体なんだ……!!



まさか藍田のおっぱいが見れる瞬間が訪れるとは。

吉良先生は露わになった胸を庇うようにする藍田の両腕を下ろさせ、

肩と背中にそっと手を添えて背筋をしっかりと伸ばさせた。



「あら、藍田さんの胸、とっても素敵よ？  
肌も形も綺麗だし」

「・・・」

励ました  
つもりなのだろうが、

藍田は余計恥ずかしそうに俯いてしまった。

気づいてはいたが、  
吉良先生・・・この人ちよっとズレている。



「ちょっと乳頭の色を確認させてね。」

吉良先生は藍田の  
おっぱいを  
正面から  
まっすぐに見つめた。

「淡いピンク色で、  
乳輪の境はなだらかなグラデーションに  
なっているわね。乳頭の色も薄めで、  
そして乳輪の周りに産毛がすこし」





「それじゃあ、

胸囲を測るからそのままじっとしていてね」

吉良先生は引き出しから  
メジャーを取り出し、  
藍田の胸に巻きつけた。

「ほら、もっと胸を張って」

「.....っ」

藍田は言われるがまま、真っ赤な顔で胸を張る。



「えっと・・・うーん。あら、だめだわ」

吉良先生はなぜかメジャーを巻き戻すと、俺に向かって差し出した。

「松永先生、測ってもらっても？」



「ぼ、僕が・・・?!」

「実は最近、細かいのが読めないのよ  
まあ・・・老眼ってやつよね」

「……………」

・・・マジかよ。

一瞬で思考が巡る。

だが、すぐに冷静さを取り戻した。



一端の教師として、

こんな不純な気持ちを生徒の前で  
露見するわけにはいかないのだ。

「わかりました」

俺は真顔でメジャーを受け取った。

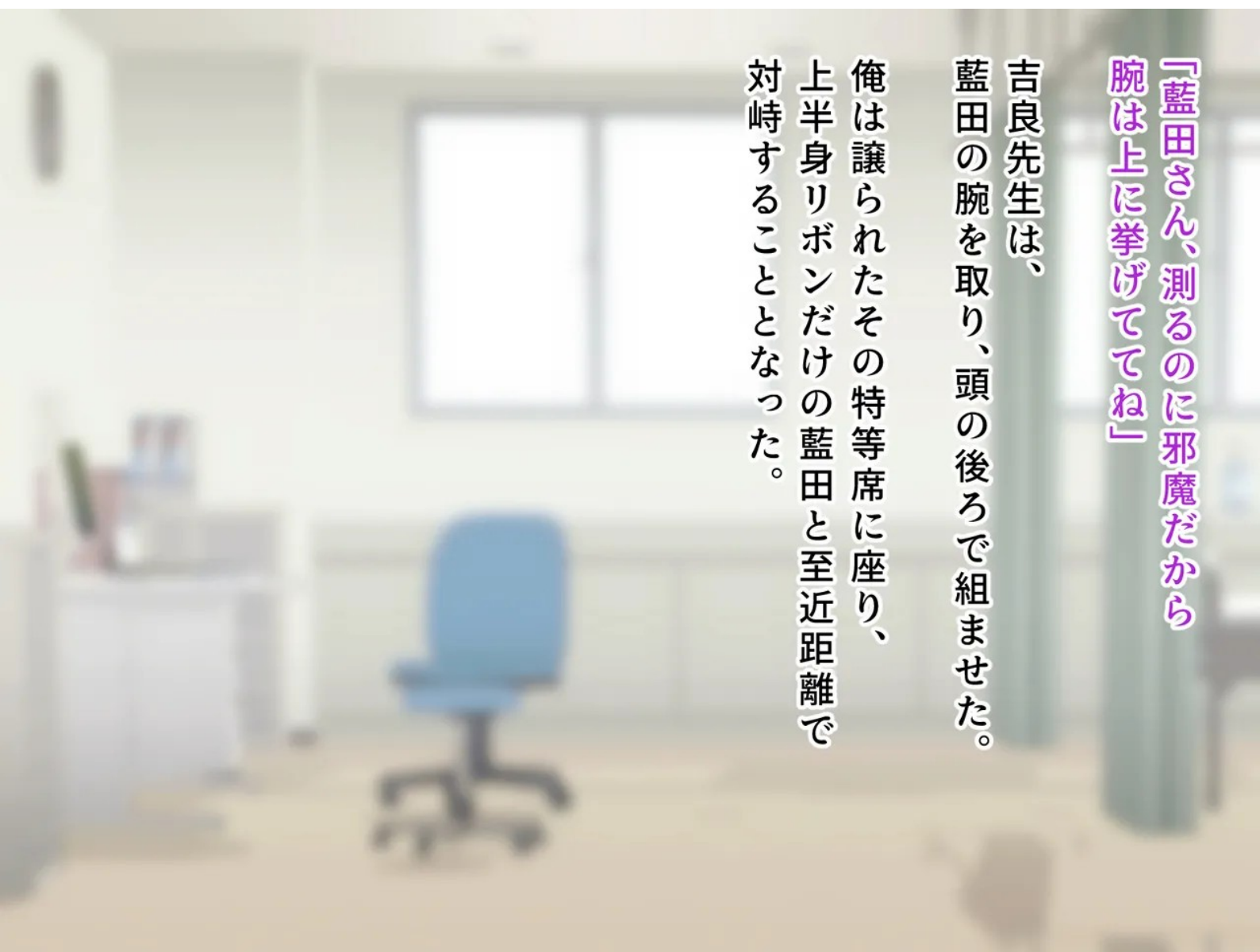


「藍田さん、測るのに邪魔だから  
腕は上に挙げててね」

吉良先生は、

藍田の腕を取り、頭の後ろで組ませた。

俺は譲られたその特等席に座り、  
上半身リボンだけの藍田と至近距離で  
対峙することとなった。



「じゃ、測るぞ」

「……………」

藍田は口を噤んで  
涙目になっている。

いつも冷静な藍田が  
こんな表情を見せるとは……

俺はメジャーを手に、震える腕を  
藍田の背中側に抱えるように回した。



藍田の生おっぱいが眼前に広がる。

あ、あ、頭がどうにか  
なりそうだ。

背中側からメジャーを  
引いてきて、  
手前で交差させる。

や、柔らかか……っ

指が藍田のおっぱいに  
微かに触れた瞬間、  
その感触に思わず  
手が止まる。





「えっと、もう少し…こ、これでいいのか…?」

動揺を誤魔化そうと  
独り言を  
つぶやきながら、  
何度もメジャーを  
調整し直す。

人差し指と中指の  
第三関節に  
全神経を集中させる。  
柔らかくて、  
弾力もあって…

「……っ」

藍田の身体がびくと震えた。



メジャーが乳首に当たったようだ。

微かに触れるだけでも  
藍田は反応し、  
その度におっぱいが  
揺れてしまう。

何度も乳首の部分に  
メジャーを  
合わせようとする。

だが、どうにも  
ずれてしまう。





「んっ…」

藍田がビクッと動いたたびにおっぱいが揺れ、  
メジャーが滑り落ち、やり直し。  
これを何度も  
繰り返すことになった。

「ご、ごめん、藍田。  
すぐに終わるから」

やばい。いつも制服のブラウス越しにみていた、  
あのおっぱいが目の前に…





理性が飛びそうなところだが、  
なんとか持ち堪え真顔を保つ。

俺は夢中になって藍田の乳首に  
メジャーを合わせた。

ふんわりと埋もれていた  
藍田の乳首は  
みるみる突出してきて、  
余計に測り辛い。

「松永先生、乳首の上で測るんですよ」

「え？」



上って・・・？

ああ、そうか。乳首上を  
測るんじゃないかって  
乳首の上に  
メジャーを  
乗せる感じか。

俺はメジャーを  
持ち直し、  
乳首の上に  
引っ掛ける  
ようにした。

「えー、と・・・96、2cm」



「96、2cmね。やっぱり平均と比べると、  
藍田さんの胸囲はかなり大きいわね…」

次は乳輪径、乳頭径の計測ね」

にゅ、にゅりんけい…？  
次は何だ。息つく暇もない。

「松永先生、これで計測を」

そう言いながら、  
当然のようにノギスを渡してくる吉良先生。





「え、えっと・・・」

俺はノギスをまじまじと眺める。

「それじゃまずは乳輪から」

こ、これで藍田の膨らんだ乳輪を・・・



俺は恐る恐るノギスの爪の部分で  
藍田の乳輪を挟んだ。

「っっ」



「ギュッて潰しちゃダメよ。軽く触れる程度にね」

「ええっと・・・」

思った以上にノギスの扱いに手間取る。

これまでまともに触ったことがない。

というか、どうやって測るんだ？





「ちょっと松永先生、  
ノギスの使い方も知らないの？」

「…す、すみません」

見かねた吉良先生が  
俺の横に  
膝について説明を始める。

「まず、ノギスの  
こっちの部分を  
軽く当てて！」

スライダーを  
ゆっくり動かす。  
強く押し付けすぎないように気を付けて」



「そしてここ、副尺の目盛りの0の箇所、  
どうなってる？」

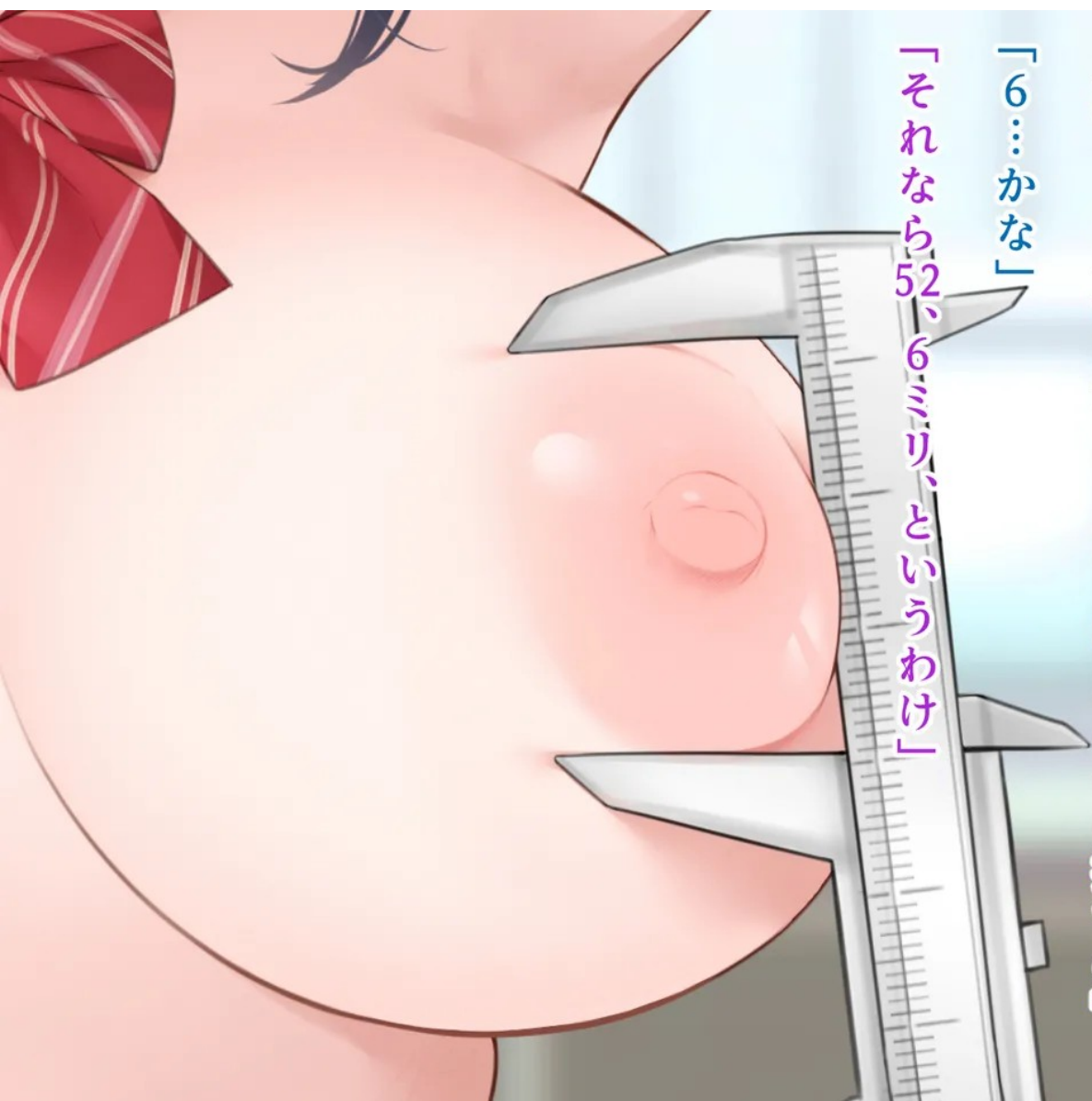
「52ミリとちょっとです」

「そして次に」

「メモリとメモリがぴったりなところを探すの」

「6…かな」

「それなら52、6ミリ、というわけ」



「なるほど……！こうやって読むんですね」

感心したところで顔を上げると、  
恥ずかしそうに  
顔を背ける藍田がいた。

おっぱいの先端を  
二人の大人に凝視されていたのだから  
無理もない。





「えーと、乳輪径が52、6ミリと。  
平均が38ミリ前後と言われているので、  
かなり大きめね。  
うーん藍田さんは  
乳房がとっても大きいから、  
特に問題はなさそうだけれど……」

吉良先生は資料を  
見ながら、  
藍田の乳輪について  
あれこれ言っている。

藍田は大人しくしているが、顔が真っ赤だ。  
ただただ時間が過ぎるのを待っている。



「じゃあ次は乳頭ね」

にゆうとう。  
ち、乳首のことだよな。

藍田の乳首はぷっくりした  
乳輪の先にふんわりと佇んでいる。

俺はノギスの爪の片側を藍田の乳首に  
当てがった。



「あ…っ！」

「あ、ごめん！」

挟みすぎたか。  
藍田は少しだけ声を漏らし肩をすくめた。





「あ、だめよ、胸を張って。ほらもっと」

吉良はすぐさま藍田の姿勢を正させた。

「はい……」

藍田は顔を  
真っ赤にしながら、

必要以上に乳首を  
突き出すようにしている。

めちやくちや恥ずかしそうなのに、  
言われたことを一生懸命やるのは  
ほんと藍田らしい。



慎重にほんの少しずつスライダーを  
緩めていく。

目盛りを読もうとするも、  
乳首はみるみる膨らんで大きくなってきて、  
ノギスの爪の間で狭そうにしている。

俺はもう一回、  
キュッと乳首を  
挟んでみた。

「んんっ……!!」



ふわっと柔らかそうだった乳首が  
今では見違えるようにピン！  
と起き上がっている。

今度こそ。再びノギスを藍田の乳頭に当てがい  
慎重にスライダーを動かす。

藍田は目を閉じてじっと耐えている。





「えーと……9、53ミリですね」

「あら本当？ 藍田さんは  
乳輪はすごく大きかったのに、  
乳頭はやや小さめなのね。」



「これで胸の測定は終わり、と。  
次は……」

吉良先生はふと藍田の様子を見て、動きを止めた。

特に運動したわけでもないのに  
藍田は肩で息をしていた。



「緊張して疲れたでしょう。  
ちよつと休憩しましょうか」

頬を上気させる藍田の肩に、  
タオルケットをかける吉良先生。

藍田は、  
渡されたタオルケットを素早く  
身体に巻き付けた。





俺は、少し離れた椅子に腰掛ける。

瞳を潤ませ真っ赤な顔の藍田を見て、  
内心ドキリとしたのだ。

もしかして、

やっちゃったのか？俺。

藍田のおっぱいに夢中で、

冷静になれてなかったかもしれない。

男性教師が女子生徒のおっぱいをノギスで  
測るなんて、越権行為にも程があるだろ…

でももう、やってしまったものはしょうがない。

いや、そもそも、ちゃんとした大学の  
研究なんだろう？

俺は吉良先生に言われた通りやっただけだ。

うん、何も問題ない。

俺はそう信じるしかなかった。

「藍田さん、頑張ってくれてありがとう。  
先生たちもこれが初めてだから、  
段取りが悪くてごめんなさいね」

吉良先生はペットボトルのお茶を  
紙コップに注ぎながら、優しい声で話を続ける。

「藍田さんはしっかりしているから、  
つい頼りにし過ぎてしまうわね。」

お家でもそうなんでしょう？  
：：確か、弟さんがいるのよね」



藍田は一瞬顔を上げて頷き、  
また視線を落とした。

「はい…弟は、生まれつき身体が弱くて…」

「そう、心配でしょう。」

でも、その経験があったからこそ、藍田さんは  
医療の道に進みたいと思ったんでしょ？

弟さんのためにも、  
きっとあなたはいい医師になれるわ」





吉良先生は、お茶を注いだ紙コップを  
藍田に手渡す。

藍田は慎重な手つきで受け取った。

「先生はね、昔は医療分野の研究に  
携わっていたのよ。

ご年配の方も若い子も含めて、  
たくさんの患者さんのデータを扱ってきたわ。

だからこうして医療に貢献できるのは  
本当に光栄だと思っているの」

藍田はお茶を少しずつ口に含みながら  
静かに耳を傾けている。



「あなたくらいの年齢だと、  
自分の身体の急激な変化に戸惑ったり、  
他人と比べてしまうのも分かるわ。」

「ただね、みんなそれぞれの成長があつて  
その計測データは  
みんなの健康のために必要なもの。」

「あなただって  
医学の道を志すのなら、  
いずれこういった検査を行う立場に  
なるかもしれないのよ」





俯いていた藍田が一瞬、吉良先生を見上げる。

「あなたの協力が、将来の医療の発展に繋がる。そう考えたら、もう少しだけ頑張れるんじゃない？」

「…」

藍田は視線を落とし暫く考え込んでいたが、やがてゆっくりと顔を上げ、小さな声で呟いた。

「そう、ですよ。ね。ごめんなさい。私…」

「さ、ゆっくりでいいわ。飲み終わったら続きを始めましょう」







「さて、再開しましょうか。」

次はデルマトームに沿った表在覚の測定ね」

吉良先生はそう言いながら、

体の各部分に対応する

神経のエリアが色分けされた図を見せた。



「簡単に言うと、

神経の働きが正常かどうかを確認する検査。

それじゃ、ベッドに横になって」

「脚は肩幅に開きましょう」

藍田は吉良先生に促され、  
上履きを脱いで保健室のベッドに横たわった。





「この知覚検査用の筆で肌に軽く触れて、  
触覚の感度と部位認識能力を確認していきます。  
ランダムに触れるから、触れられたのを感じたら  
どこが感じたか答えてね」

吉良先生は藍田の肩の辺りに筆先で  
スツと触れる。

「はい、わかりました」

藍田は  
こそばゆそうに  
肩をすくめて  
緊張気味に頷いた。



「それじゃあ、目元を隠すからね」

吉良先生は藍田にアイマスクをつけ、  
視界を遮った。

「松永先生はそちら側を」

そう言って吉良先生は俺にも  
一本の筆を渡してきた。

どうやら俺は右側を  
担当することになったらしい。

「では始めます」





「では、ここは？」

「えっと・・・肘です」

「右腕？左腕？」

「左腕です」





「ここは？」

「左の・・・手首です」

「ここはどうかしら？」

「左の肩です」



吉良先生は「ほら、松永先生も」と言いたげに  
筆先を俺の方に向け、宙で動かした。

俺は静かに頷いた。

目隠しをして刺激を待つ藍田。

まずは手始めに、

肩のあたりか……？





「……っ」

藍田の身体がぴくんと  
反応した。

ずっと左側続きだったから  
驚いたのだろう。

「……右肩です」

今度は驚かせないように  
優しく触れる。

「……っ」

腕……右の二の腕です」

またもぴくんと  
反応する藍田。





「…よし、  
じゃあ胸のタオルをとらせてもらうわね」  
「あっ…」





吉良先生は返事を待たずに  
藍田の胸に巻かれたタオルを  
すばやく抜き取ってしまった。

藍田のバストがふたたび露わに。  
柔らかく  
横に流れる乳。

藍田が咄嗟に  
胸に手をやるが、  
吉良先生がすぐさま  
横に下ろさせる。





吉良先生は今度は胴部に触れていく。

「…お腹…の真ん中です」

タオルが取られてしまったからか、  
心なしか  
弱々しい声  
である。

「…あっ

……胸です」

「胸のどの辺り？」

「む、胸の…ああっ…」

藍田は大きく身じるいだ。



「うーん、どうやら胸が敏感みたいね」

吉良先生が容赦なく  
次々とおっぱいに触れている。

「あっ、んんっ」



俺もこの際だ。  
負けじとおっぱいをくすぐる。

「ひゃあっ」





横乳、下乳、どこに触れても、  
藍田は大きな反応をみせた。

藍田が絶え間なくおっぱいを揺らすので  
楽しくなって余計にいじめたくなくなってしまった。



「なるほどね」

吉良先生はクリップボードを手に取り、  
記録用紙に何やら書き込んでいる。

その隙に  
俺は思い切って、  
藍田の  
乳首に触れた。



「…あぁっ!!」

藍田は想像以上に  
大きな声を漏らして身悶えた。





「ん？今どこを触ったの？」

やべ。ばれたか。

「あ、えと、ここです」

俺はもう一度、  
藍田の乳首を  
ひと撫でした。

「あっっ！」

「なるほど…  
特に、乳頭の  
感度が高い、と」



「それならここはどうかしら」

吉良先生は今度は脇の下に  
筆を大きく滑らせた。

「ああっ……！」

「なるほどね。  
乳頭と脇……」



「感覚過敏の疑いがある箇所は、より詳細に検査を行います。」

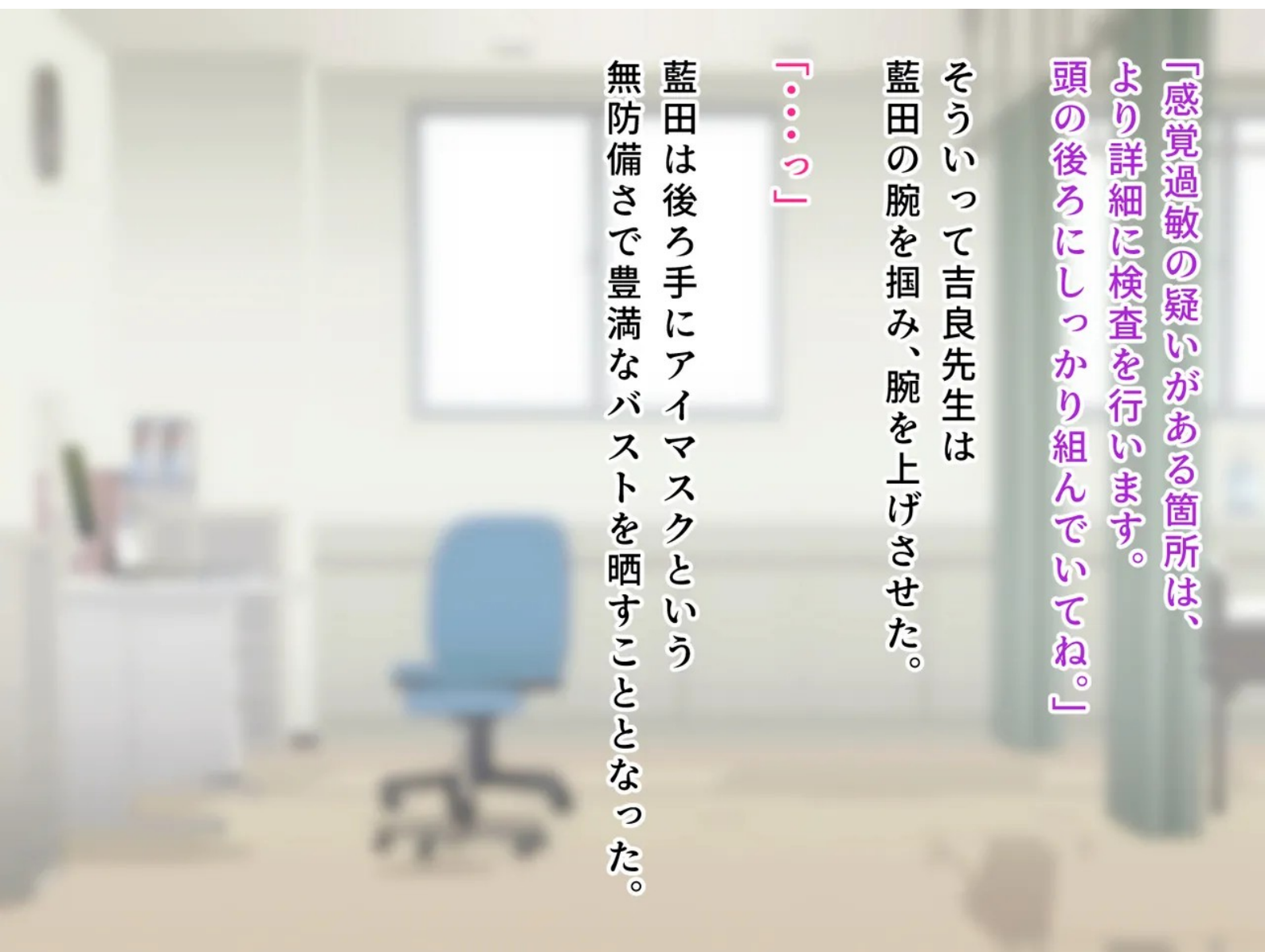
頭の後ろにしっかりと組んでいてね。」

そういつて吉良先生は

藍田の腕を掴み、腕を上げさせた。

「…っ」

藍田は後ろ手にアイマスクという無防備さで豊満なバストを晒すこととなった。







「今どこに触れたかわかる？」

「…左の胸です」

「胸？ 胸の  
どの辺りかわかる？」

「…ち、  
乳首の近くです…」



「そうね、乳輪よ。触っていくから覚えてね」

「ここが乳輪の  
上、下、右、左」

吉良先生は  
そう言いながら、  
感覚を覚えさせるように  
乳輪を筆先で  
一周触れていった。





「それじゃあ乳輪の感覚テストを始めます」

「これから10回触れるから  
左右どちらの胸か、  
乳輪の上下左右どこに触れたか答えてね」

「はい……」

吉良先生は  
記録用紙を挟んだ  
クリップボードを  
手に持つと、  
俺の方を見た。

「それじゃあ私は記録するので、  
松永先生お願いします」



「…じゃあいくぞ」

俺は藍田の  
ふっくらとした乳輪に筆先を構え、  
こちょこちょと  
くすぐるように往復させた。

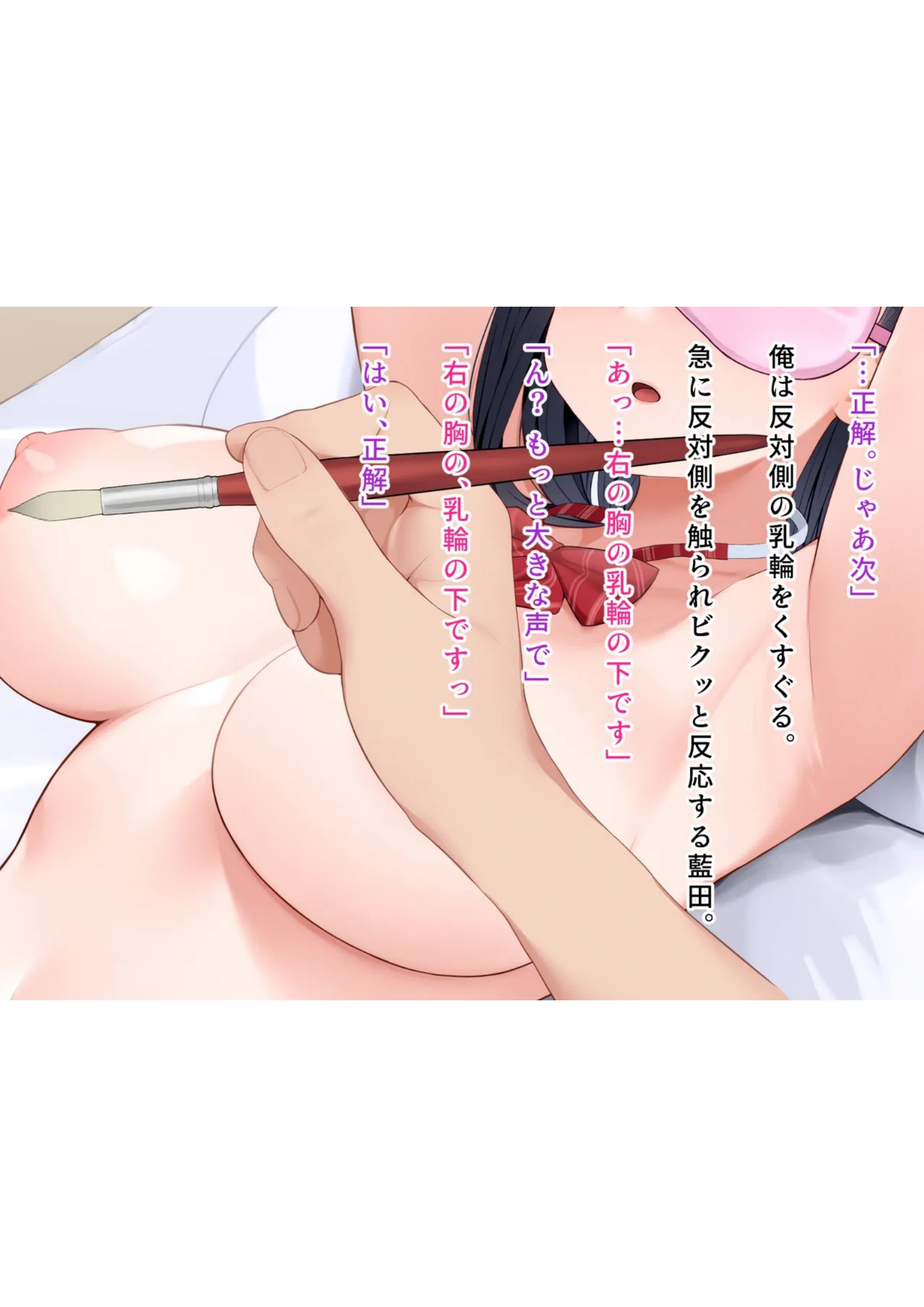
「あつ、…右側です。」

あ、えつと左の…」

「左胸の  
乳輪の右側、  
ときちんと  
言いなさい」

「…左の胸の  
乳輪の右側です…」





「…正解。じゃあ次」

俺は反対側の乳輪をくすぐる。

急に反対側を触られビクッと反応する藍田。

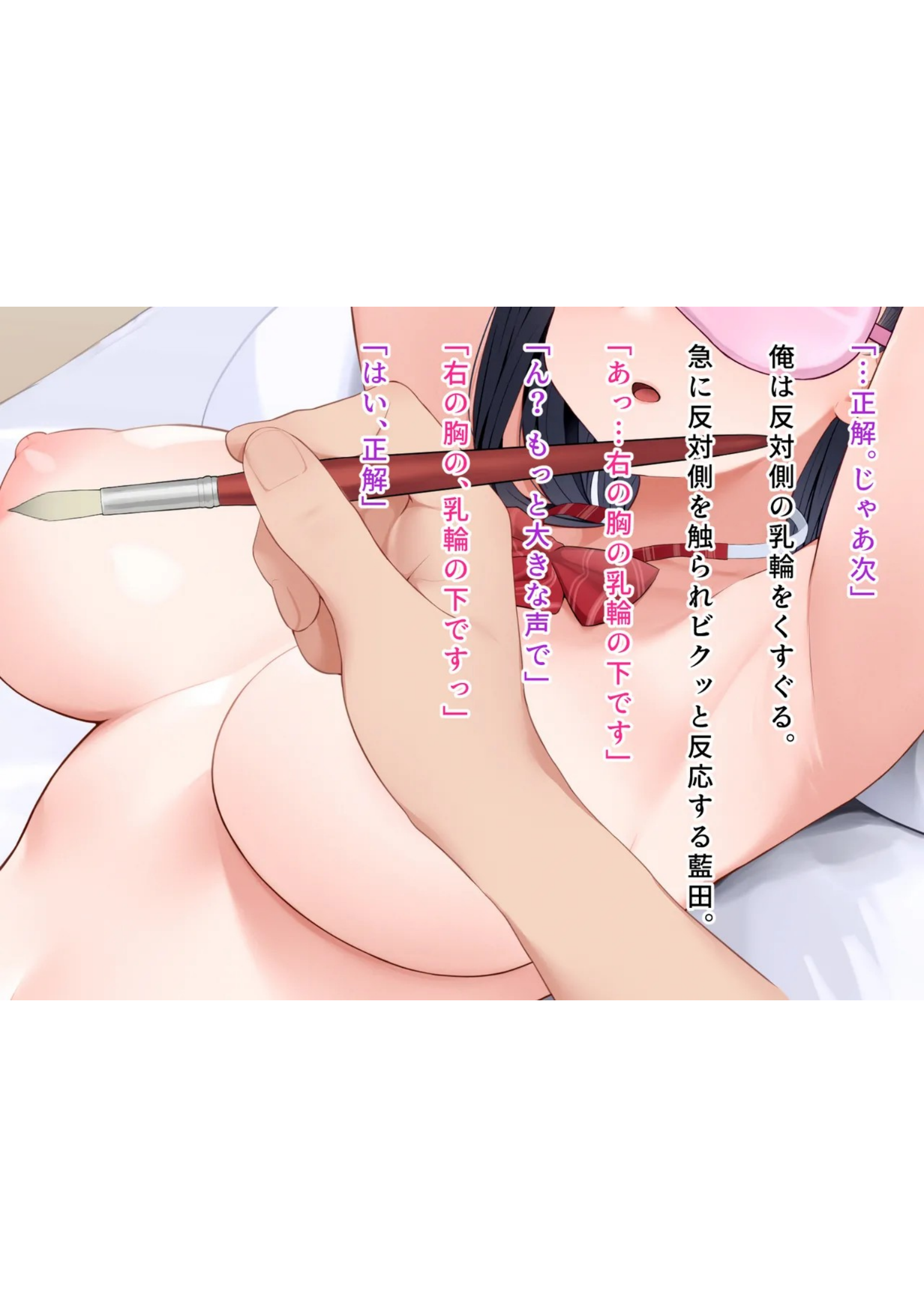
「あっ…右の胸の乳輪の下です」

「ん？もっと大きな声で」

「右の胸の、乳輪の下ですっ」

「はい、正解」





「…正解。じゃあ次」

俺は反対側の乳輪をくすぐる。

急に反対側を触られビクッと反応する藍田。

「あっ…右の胸の乳輪の下です」

「ん？もっと大きな声で」

「右の胸の、乳輪の下ですっ」

「はい、正解」

「左の胸の乳輪の…上です」

「正解」

こんな調子で  
藍田はどんどん  
正解していった。

「いいわ。乳輪の  
感覚は正常そうね。」

次に乳頭の検査です」



「これから松永先生に  
乳頭を摘んでもらいます」

はい。。。?!

「……っ！」

「摘まれたと思ったら、  
摘まれました  
と教えてね。」

それじゃあ松永先生  
お願いします」





俺がつ…つまむ…

さっき筆先で軽く触れただけで、  
あんなに敏感だった藍田の乳首を…

乳輪を散々

弄ばれたせいで、

藍田の乳首はすでに

恥ずかしいほど

ピンと立って

しまっている。

俺は意を決して

右手の指で藍田の乳頭を摘んだ。





「あああっ!!」

藍田の身体がびくんと大きく跳ねた。

想像以上の反応で、  
ピンッと指が滑って乳首を離してしまった。

「ああ、ダメよ先生、すぐ離しては。  
しっかり摘んでいてください」

「ああ、すいません」

「藍田さんも、身体は  
動かさないの」

「……ごめんなさい……」





「ではもう一度」

俺はさっきよりもやや強めに、  
藍田の乳首を摘んだ。

「あぁっ!!!」

ついに藍田は腕を下ろして、  
胸を庇うようにガードしてしまった。

「だめね、  
さっきからすぐ腕を動かしちゃうから…  
これで固定しておきます」



吉良先生は三角巾を細長く畳んで  
藍田の手首を縛ってしまった。

アイマスクに、  
手まで縛られてしまった藍田。

「それじゃあ  
やり直し」

俺はさっきよりも  
さらに強めに、  
乳首を摘んだ。





「ああんっっ!!」

藍田はまた  
大きな声を漏らした。

なんとか身体を  
動かさずに  
堪えたのだが、  
耳まで真っ赤に  
染まっている。





「藍田さん。ああん、じゃなくって…」

「あ、えっと…摘まりました…」

「どちらの何？」

「左の乳首を摘まりました」

「乳頭ね。」

「いいでしょう。」

「じゃあ次」

俺は今度は右の乳首を摘んだ。

「…っ！」

刺激に備えていたのだろう。  
藍田は全身に力を込め、  
口を固く閉じ、  
なんとか堪えた様子だった。

「右の乳頭を  
摘まれましたっ」



「いいわ、じゃあ最後よ」

吉良先生から  
ジェスチャーを受け、  
俺は藍田の  
両方の乳首を摘んだ。







「んああっ……!!!」

予想外だったのか、  
固く閉じた唇から大きな吐息が漏れ出た。

「…両方の乳頭を摘まれましたっ！」

「はい、  
よくできました。

これで乳頭の  
感覚テストは  
終わりです」





「さて、次にいきましょう。」

「もうひとつ、

感覚過敏の

疑いのある脇の下の

感覚の強さの

検査になります。」

そう言って吉良先生は

藍田の脇の下を

指先でくすぐった。

「あっ……っ！」





「どう？くすぐったい？」

「はい・・・」

「では、いまの  
この感覚の強さを  
10とします。

これから刺激を  
与え続けるので、  
5分後に感覚がいくつになっ  
たか教えてね」

そう言って吉良先生は机の引き出しから  
ストップウォッチを取り出し、右手に構えた。



「では松永先生、お願いします」

「またもや俺にやらせようとしてくる吉良先生。」

「自分で手を下したくないの  
だろうか？」

「じゃいきます」

「どうぞ」









「あつ、あつはは、あはは……!!」

俺がくすぐり始めると同時に、吉良先生は  
ストップウォッチのボタンを押した。

「あはははっ……!!」

「藍田さん  
だめよ！」

そんなに  
動いたら」





「あは、あああ、だめ〜！」

「藍田さん肘をしっかりと開いて。  
閉じてきているわよ」

「は、はんん〜!!!」

藍田は  
肘を引き、  
ツンと胸を  
差し出した。





「藍田さん、大丈夫？」

「くすぐったいです、もう、だめですっ!!」

「もう少し  
頑張って!」

藍田はたまらず  
肘を大きく動かした、  
次の瞬間……







アイマスクがポロリ。  
笑い顔の藍田と目が合う。

藍田はちらりと自分の揺れる胸元を見て、  
みるみる顔を染め上げた。

「……っ！」

やばい、俺が  
ガン見しながら  
ムキになって  
くすぐっていたのも  
バレたかもしれない。





バレてしまったものはない。  
俺はくすぐる範囲を大きくして  
おっぱいの付け根の方までくすぐった。

「あっ……んっ……!ん……」

藍田は恥ずかしげに  
目をキュッと閉じて

ひたすら俺の  
くすぐりに  
耐え続けた。



「んんんっっ…ああっあははっ！」

藍田は刺激になれる様子もなく、  
身体とおっぱいを左右に振り続けている。

身体はどんどん熱く、  
汗ばんできている。

「あと2分よ！  
頑張って」





俺は動きに変化をつけながら、  
指を動かし続ける。

思い切って乳首の方までくすぐる。

「あっ! あんっ!  
あっ! あはははは!!」

腕を縛られ、  
敏感な乳首を  
くすぐられてなお  
笑顔でおっぱいを  
揺らし続ける藍田が  
たまらない。





「ああっ、……先生っ、だ、だめえっ……！」

顔は嬉しそうだが  
息絶え絶えに訴える藍田。

もうずっと  
動き続けていて  
おっぱいも  
汗だくだ。



「はあっ、ああん、んっ…もうっもうだめえっ」

このままだと  
藍田が呼吸困難になって  
しまふんじゃ…  
そんな心配が  
よぎったところで、  
吉良先生が  
ストップウォッチを  
止めた。



「はい！おしまい」

5分経ったようだ。

「はぁ……はぁ」

やっと刺激から  
解放された藍田は、  
乱れた呼吸で  
ぐったりとしている。





「お疲れ様。どうだった？ だんだん慣れて、感覚も弱くなってたんじゃない？」

「……はあ、はあ」

「それとも変わらず、かな？」

藍田は顔を何度か縦に振った。

「…五分間、感度は変わらず…と

呼吸が落ち着いたら

もう少し詳しく聞くことにするわね」

吉良先生は藍田と対照的な涼しい顔で記録表に記録していった。

「落ち着いた？  
あんまり休む間もなくて申し訳ないけど、  
次に移らせてもらうわね」

吉良先生は  
ずれ落ちた  
アイマスクを  
もう一度  
藍田の目元に  
付け直した。







「今度は脚の感覚をみていくからね。  
どこが触れられたか教えてね」

そう言っ吉良先生は  
スカートをたくし上げた。

藍田のすらっとした太ももが露わに。

「っ……」

藍田は何か  
言いかけて、  
唇を噛み締める。

縛られた手は  
そのままだし、  
おっぱいも  
隠してもらえない。

まな板の上の鯉だ。



吉良先生は筆を構えて  
藍田の脚に触れていった。

「ここは？」

「…左の膝です」

「ここは？」

「ふくらはぎです」

藍田は

触れられた部位を

淡々と答え、

吉良先生は

用紙に記録する。



「では、松永先生も」

「ああ、はい」

俺も藍田の下半身に  
筆を這わせていく。

「右の膝です」

「…右の太ももの  
外側です」

「ん…右の太ももの  
…内側」





俺が筆先で触れるたび、  
太ももにぴくっと力が入ってしまう藍田。

「あっ脚の…  
右の脚の付け根です」

「あっ、もっと内側です」

「うっ、あ、ええっと…」

視界を奪われ、  
どこに来るか  
分からない刺激に、  
必死に耐えている。



An illustration of a person's legs from the knees down, resting on a white hospital bed. The person is wearing a dark blue hospital gown. The legs are slightly apart and relaxed. The background shows a blurred hospital room with a window and a bed frame.

「うん、脚の感覚も問題なさそうね。  
松永先生、靴下を脱がせてあげてくれる？」

「ああ、はいっ」

俺は藍田の足元に  
周り、白のショート  
ソックスを  
そっと脱がせる。

綺麗な足先だ。  
藍田は恥ずかしげに  
足の指をキュッと  
動かした。

An illustration showing a person's legs from the knees down, resting on a white surface. A hand is holding a reflex hammer, tapping the heel of the right foot. The person's legs are slightly apart, and the skin is a light pinkish tone. The background is a soft, out-of-focus yellow and green.

「ここは？」

「ひゃっ」

吉良先生が足の裏を筆で触れると、  
藍田は声をあげて脚を縮めた。

「足裏の反応だけ強いわね」

再び足の裏に筆を這わせた。

「ひゃあっ」

藍田は反射的に  
脚を引っ込めた。

「なるほど足裏も詳細を  
調べる必要があるわね」





「それじゃあ、  
最後は・・・」

そう言いながら  
藍田のパンツに  
手をかける  
吉良先生。

ま、まさか・・・



「あっっ！」

—  
!!

吉良先生は  
あっという間に  
パンツを膝まで  
下げてしまった。

「〜!!」

藍田はなんとか  
隠そうと  
もじもじと  
両膝を合わせるが、  
うっすらと生え揃った  
陰毛が覗いている。

「ここも  
調べなくっちゃ。  
少し  
脚を開いてね」

「だ、だめです…」

「そうは言っても、  
検査なんだから」





後ろ手に縛られたままの藍田が  
ささやかな抵抗を続けるが  
吉良先生はパンツをスルスルと足先まで  
下ろしていき、完全に脱がせてしまった。

「ほら、脚を  
開くのよ。  
協力して」

「……っ」

藍田は頑なに  
両膝を  
くっつけている。

「うーん仕方ないわね。  
じゃあ、足裏の検査から  
先にしましょうか」





「先に足裏の感覚検査をするわ。」

藍田からの返事はなかったが、



吉良先生は検査手順表を見ながら  
独り言のように呟き、  
机の引き出しを確認する。

吉良先生は手にしたものは  
プラスチック製のブラシ二つ。



「検査方法は脇の検査の時と同じ。

足の裏を刺激して、感覚が弱くなるまでの時間を測定します。」

そう言いながら藍田の足の裏をブラシでひと撫でする。

「あぁっ!!」

思いつきり

足を引っ込める藍田。

これは

・・・相当くすぐったいらしい。



と、俺にそのヘアブラシを渡してきた。

「それじゃ松永先生お願いします。

私はストップウォッチで時間を測りますから」



今度は足の裏を

くすぐれてことだよな。

俺はブラシと

藍田の無防備な足の裏を  
交互に眺めた。

「では、いきますよ」

「……はい……」

藍田はちゃんと聞いているのかいないのか、  
か弱い声で返事をした。

吉良先生が  
ストップウォッチを  
手に取る。

「では、始めます。  
松永先生、どうぞ」





俺はブラシを持ち、  
藍田の足の裏を軽く擦り始めた。

藍田は唇を  
固く結び、  
必死に耐える。

しかし…

「ん、んん、あっ！」



藍田は大きく身悶え、脚を引っ込めてしまった。

「3秒…」

吉良先生が  
ストップウォッチを止めて告げた。



「藍田さん、動いちゃだめよ。」

検査にならないでしょう。くすぐったいでしょけど、もう少し我慢しましょう」

藍田は深く息を吐き、  
少しうつむきながら答えた。

「…すみません…」

「松永先生、足首をしっかりと押さえてあげて。  
こちらの足は私が」





俺は左手で藍田の右足首を掴み  
ブラシを構えた。  
もう一方は吉良先生が同じようにする。

「では、もう一度  
やってみましょう。  
リラックスして、深呼吸してね」

藍田は深く息をはいた。  
脚にはすでに力が入っているようだ。



「はい、スタート」

吉良先生がストップウォッチを押すのと同時に、俺と吉良先生は足裏の刺激を始めた。

「んっ、あああっ」



「…5秒」

藍田はまたもやすごい力で足を引っ込めてしまった。

「うーん、困ったわね。  
これじゃ検査にならないから…」

吉良先生は藍田の腕を縛ったときと同じように三角巾を細長く折っている。  
まさか…





「よし、これでもう一度やってみましょう」

藍田は保健室のベッドの柵に  
足まで固定されてしまった。

藍田は  
両手両足  
縛られて  
しまったのだ。

脚は開かされ、  
藍田のおま○こが  
露わになる。



目隠しされ身動きの取れない  
全裸の女の子の足裏をくすぐる・・・

どんなプレイだよと突っ込みたくもなるが、  
吉良先生はいたって真面目だ。

「じゃ、いきます」

俺と吉良先生は  
再び両足の  
刺激を始めた。







「あっあああーだめえ!!」



開始早々、  
藍田は両足や身体全体を  
大きく振らせた。

なりふり構わず  
おっぱいを揺らし、  
膝を開いたり  
閉じたりを繰り返す。  
ベッドが揺れる。

「藍田さん、  
暴れちゃだめ  
ベッドが  
壊れちゃうわ」



藍田は唇を噛み締め、  
全身に力を入れて耐え始めた。

全身汗で光り、  
頬は赤くなっている。

「その調子。

あと4分、  
頑張りましょう」





藍田は顔を赤らめながらも、  
何とか暴れないように  
膝をピンと伸ばして力を込める。

足先はブラシの  
刺激から逃れようと  
上下左右に  
ひよこひよこと  
動かし続けている。

「まだいけるわ！  
がんばって！」

「あぁっん、んゝ!!」





それもととう我慢の限界か、  
今度は膝を曲げたり伸ばしたり  
腰をガクガクと振るわせる。

恥ずかしい  
股間を  
露わにしての  
腰フリに  
目が  
釘付けに  
なって  
しまう。



俺はブラシを持つ手に力を入れ、  
より素早く動かした。

「あぁっ、あははっ、んんんっ!!」

藍田は笑い声を堪え、  
たまらず顔を  
大きく振った。

目元の  
アイマスクが  
振り落とされる。





「あっ」

涙目の可愛らしい顔が露わになった。  
驚いた顔で  
大きな瞳をさらに見開く藍田。

また目が合った。

すぐに目を逸らし、  
視線を  
自分の身体に  
向ける藍田。





「やっあはは！ん、だめえ、っ！」

そう言いながら大股開きで  
股間と乳を揺らす藍田。

「ん、あっ  
あはは、  
んっんん…！」

「もう少し。  
あと少しだけ  
頑張って!!」



「あっ……はあ、はあ、ああ……んん」

だんだん動きが鈍くなってきたが、  
時折ビクンと反応する。

本当は全身疲れて  
へとへとなのに、  
身体が勝手に  
反応してしまっ  
ているようだ。

「あと三十秒！」





「ああん! ははは!」

自ら足を閉じたり開いたり  
腰を振って股間を  
突き出したり。

見ている  
こちらの方が  
恥ずかしく  
なるような  
有様を  
しっかり  
見届ける。





藍田は最後の力を振り絞る。

「んっ、ん、ふうっ、んん、ふーっ」

「5、4、3、2、1：：  
はい、5分たったわ」

と吉良先生は  
時間を確認し  
ストップ  
ウォッチを  
止めた。



「はぁ、はぁ……っ」

やっとの思いで刺激から  
解放された藍田。

らしからぬ  
大きな笑い声を  
響かせていたのが  
ピタッと  
静かになり、  
我に返った  
様子で  
顔を一層  
赤くする。



「お疲れ様。5分間よく頑張りました」

吉良先生は  
そう言いながら  
藍田の足の拘束を解いた。





「どう？ 5分経って、感覚は変わった？」

「はあ、はあ……えっと……」

吉良先生が聞くものの、  
藍田は息が上がっていて  
それどころではなかった。

「聞くのはちよつと落ち着いたらに  
しましょうか。」

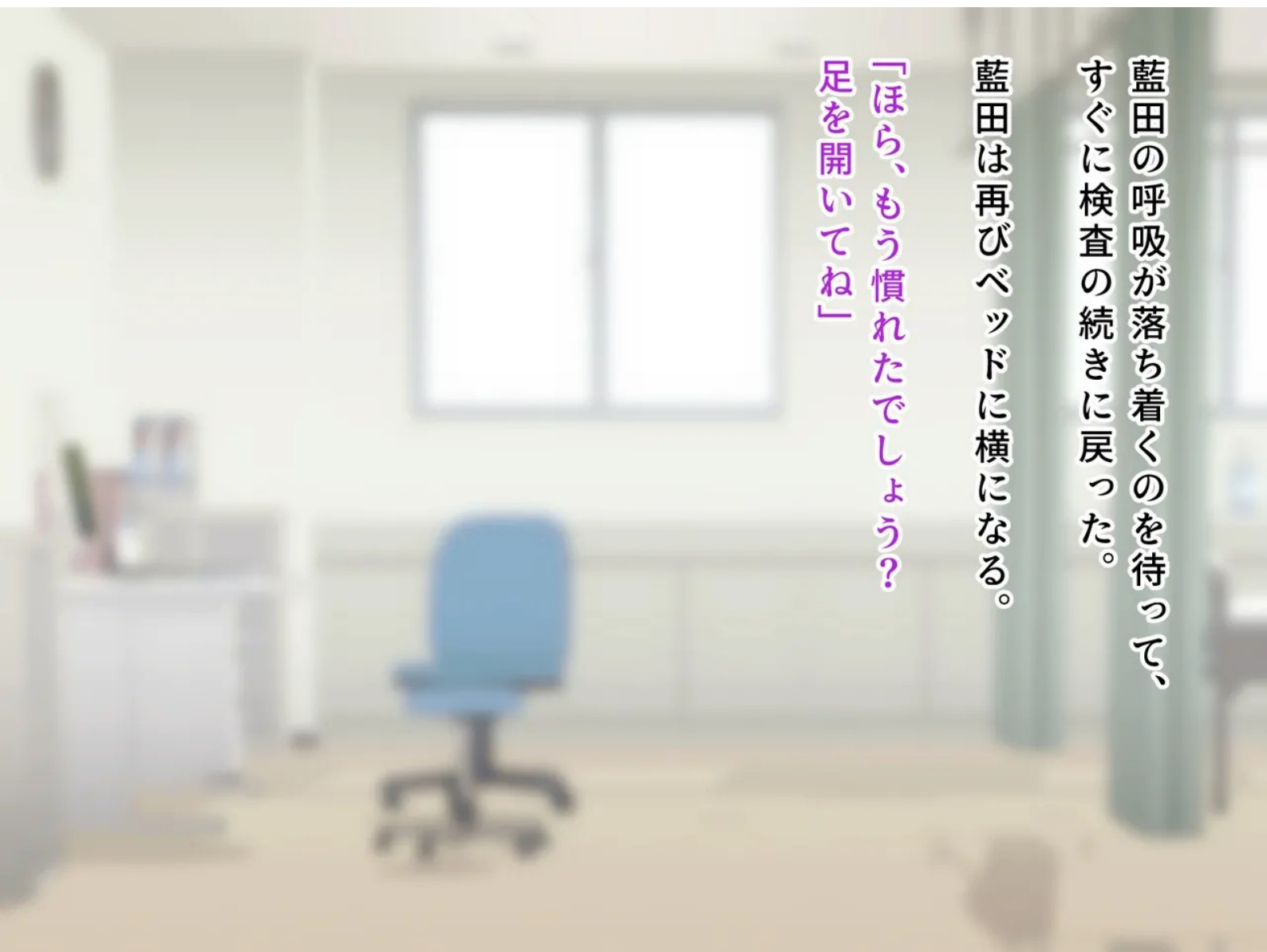
脇と足の裏を計10分間も  
くすぐられた藍田は言葉もなく、  
ぐったりとした様子だった。



藍田の呼吸が落ち着くのを待って、  
すぐに検査の続きに戻った。

藍田は再びベッドに横になる。

「ほら、もう慣れたでしょう？  
足を開いてね」









おっぱいもアソコも丸出しの大股開き。  
保健室の真ん中で、あられもない格好だ。  
ワレメもぱっくりと開いている。

「そんなに恥ずかしがら  
なくたって、私と松永  
先生はもう慣れたわよ。  
…もうちょつとよく  
見せてね」

吉良先生は藍田の  
陰部に顔を近づけて  
観察した。

藍田はますます恥ずかしがって  
真っ赤な顔を背ける。

「陰毛の発育段階はどうかしら。  
この資料、松永先生も見てください」

吉良先生が  
見せてきた  
資料には、  
陰毛の発育段階の  
区分が図で  
説明されている。

吉良先生は資料と  
藍田の陰部を  
見比べながら呟く。





「どう思います？

ステージ2か3・・・3かしら」

「そうですね、3でいいんじゃないでしょうか」

「そうね、陰毛は多くはないけど、

毛根を見る限り、しっかり生え揃っているみたい」

「生えている範囲は普通ね。

肛門の周りには

生えていないようだし。」

吉良先生は一つ一つ

確認するように声に出すと、

記録表に記録していった。



「…」

二人の大人に股間を品評された藍田。  
だんだんと膝を閉じてきてしまうが、  
その度に吉良先生が大きく開かせる。

…と、吉良先生が何か  
言いたげな目配せを  
してくる。

え、いいのか？ やっても。

俺は筆を構えて  
藍田の陰部に筆先を  
近づけていった。



「ひゃあっ」

膣口の辺りに触れると、  
藍田はびくんと  
腰を浮かせた。

もう一度触れてみる。  
今度は陰核だ。





「あぁっっ!!」

陰核を触れられた藍田は  
大きく腰を跳ね上げ、  
悲鳴を漏らした。



「うん、敏感みたい。  
詳細を調べましょう。  
少しお尻を上げてね」

そう言うと、

吉良先生は

藍田のお尻の下に

使い捨ての

防水シートを敷いた。

さらにホテルに

備え付けてあるような

使い捨ての

T字カミソリを

袋から取り出すと、

「剃毛しましょう。」

これも松永先生の方が  
信頼できそうね」



吉良先生はさも当然のように  
カミソリとクリームを俺に押し付けてきた。

「…わかりました。」

これ、全部剃っちゃっていいですかね」

「そうね、全部、

綺麗にしてちょうだい。

傷つけないように、

たっぷり

クリームを使って。」

「…」

藍田は完全に放心状態で、  
大人しく脚を広げている。





俺はチューブを手に取り、  
指先にたっぷり出した。

クリームというより  
無色透明のジェルだ。それを  
藍田の陰部に  
優しく塗り広げる。

「っっ」

藍田の腰がぴくっと  
跳ねた。ひんやりした  
感触に驚いたのだろう。

くるくると  
円を描くように指先で  
藍田の大陰唇を  
マッサージしていく。



淡いサーモンピンク色のおま○こが  
たっぷりのジェルで濡れ、  
ぬらぬらと光る。

小さな割れ目を指先で  
スツと撫でてみた。

「っ！」

藍田の腰がまた  
ピクツと動く。もう一度  
下から上に指先を滑らせる。

「っ!!」

陰核に触れたところで  
ビクンと腰が反応する。



「藍田さん、これから剃っていくわ。  
危ないから動かないように」

「…はい」

藍田はキュッと目を閉じた。





冷たかったジェルも体温で柔らかく滑らかになってきた。俺はカミソリを構える。

「それじゃ、カミソリ  
当てていくから」

「はい……」

消え入るような  
小さな声で返事が  
聞こえた。

俺は恥丘の上の方から  
カミソリの刃を  
当てていった。



案外剃り心地が良く、  
藍田のおま○こが  
生まれたままの姿に  
近づいていく。

藍田はさっきよりも  
腰を動かさないように  
している代わりに  
おま○こが  
やたらヒクヒクと  
動いてしまっている。



「藍田、危ないから。  
ここも

動かしちゃだめだよ」

俺は指先で小陰唇を  
トントんと叩いた。

「あ、う……  
ごめんなさい……」

そう言いながらも  
ヒクヒク  
動かしてしまう藍田。





ヒクヒクしている  
陰唇を  
傷つけないよう  
慎重に、  
しっかり  
剃っていく。



吉良先生がジェルを  
拭き取ると、

ついに藍田は  
パイパンとなった。

「うん、とっても  
綺麗になったわね。

それじゃあ早速  
外陰部の計測と、  
表在覚の検査を  
していきましょう」



再びノギスの登場だ。

「松永先生、ノギスの測り方はもうわかったわね。」

まずは小陰唇の長さ、つまりこの割れ目の上から下までを測って」

俺はひんやりとしたノギスの先を藍田の割れ目の粘膜が見えている部分の上下にあてがった。





「痛くないか？」

「大丈夫です…」

「えーと。長さ  
4、83センチ」

「割れ目の長さが  
4、83センチと」

吉良先生は  
復唱しながら記録する。

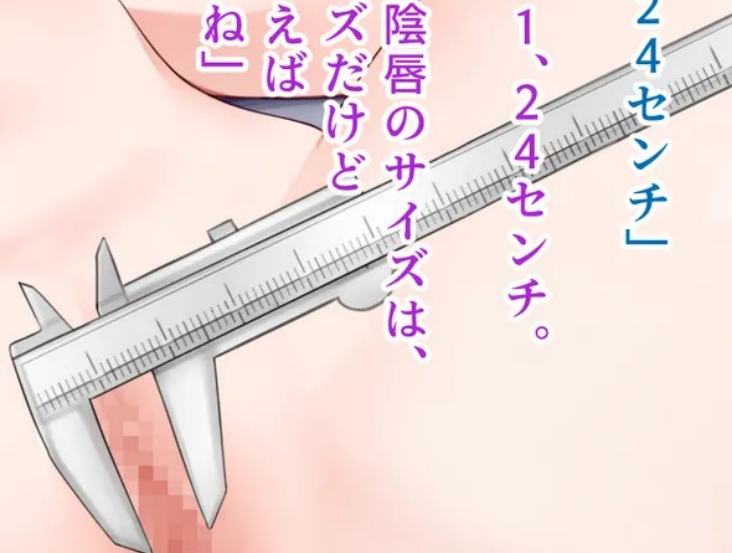
「次は小陰唇の  
横幅をお願いします」



「幅が：：1、24センチ」

「小陰唇の幅、1、24センチ。」

藍田さんの小陰唇のサイズは、  
ほぼ平均サイズだけど  
どちらかといえば  
小さめのようなね」



吉良先生の言葉を  
静かに聞きながら  
唇を噛み締める藍田。

「次に、横に大きく  
広げた状態で測ります。  
痛かったら言ってね」

「あぁっっ」

吉良先生は躊躇なく  
藍田の小陰唇を  
左右に引っ張った。

「痛い？」

「い…痛くは  
ないです」

「もう少し  
いけそうかな？  
これはどう？」







吉良先生はさらに  
左右に引っ張った。

こ、これはすごい。  
思い切り横に伸びる  
藍田のおま○こ。  
尿道口や膣口まで  
丸出しである。

「あ…  
ちよつとだけ  
痛いです…」

「いいわ。  
松永先生、  
測って」

俺はこれ以上  
無理なくらい  
左右に  
引っ張られている  
小陰唇に  
ノギスを当てた。

「・・・2、59センチ」

「引っ張った  
小陰唇が  
2、59センチね。  
かなり伸びたわね」



「最後に陰核の計測です。  
松永先生、  
ここはとても  
敏感だと思うから、  
慎重にね」

「藍田さんの  
陰核は包皮に  
埋もれているから  
少し刺激してから  
計測しましょう」

刺激・・・  
俺は筆を構えた。



俺は筆先で  
藍田のクリトリスを  
ツンツンと  
刺激した。

「…!!  
あっあああ…」

閉じようとする足を  
吉良先生が  
押さえつける。

「頑張って!  
大事な検査だからね。」



「んっん  
あ……ああ……  
んん……っ」

「藍田さん、大丈夫？  
痛くない？」

「いっ痛くは……  
あっんん……」

吉良先生に  
押さえつけられて  
いる藍田の陰核を  
執拗に、念入りに  
筆先で上下左右に  
往復する。



埋もれていた陰核がふっくらと  
ピンク色に充血してきた。

それに従って藍田の声も大きくなる。

「ん、ん…あっ、ああ…」

「陰核が大きくなって  
きたわね。」

計測してみましよう。」

「…はい」

俺はノギスを藍田の  
クリトリスに  
当てがった。







「ああんっ!!」

やや強めに挟み過ぎてしまった。  
藍田は腰を引き大きく身悶えた。

「とても敏感なのね。  
今測るからそのまま  
ちよつと我慢しててね」

藍田は目を  
キューッと瞑って、  
刺激に耐える。



「…0、68センチです」

「陰核の幅…0、68センチ。  
あら、藍田さん、陰核は比較的大きいみたい。  
どうりで敏感なわけだわ」

「はい、計測完了よ。  
お疲れ様」

ノギスから解放された  
藍田の陰唇は、  
相変わらずヒクヒクと  
動いていた。





「次は、膣分泌液が正常に分泌されるかのテストになります。

膣分泌液は性感帯を刺激すると分泌され、性交をする際に潤滑液として非常に重要になります。

藍田さんの発育具合だと、もうしっかり出ていいはずだからね」

そう言って吉良先生は藍田の股間に顔を近づける。

「松永先生、陰核への刺激をお願いできますか。私は観察しておりますので」

吉良先生は藍田の手を取って、  
藍田の秘部に添えさせる。

「こうやって自分で広げていてね。」

「……」

藍田は両手で  
自分のおま○こを  
左右に広げ  
させられた。



「それじゃあお願いします」

俺は吉良先生が  
用意した薄手の  
ゴム手袋を手にはめた。

藍田が懸命に  
広げているおま○こに  
指先を添え  
陰核を  
刺激する準備をする。





「それじゃあ、はじめ」

俺は指先で  
陰核の刺激を始める。

人差し指でコリコリと  
優しく撫で回す。



「あっ……うっ」

藍田が微かに声を漏らした。

俺はリズムカルに、スピードを上げていく。

「んっ、せ……先生……っ」

藍田の呼吸が乱れ、顔がどんどん赤くなる。



「藍田さん、足が閉じてきてるわ。  
手もしっかり添えて」

「あっ……はいっ……んっ……」

藍田はおまんこをヒクヒクと動かすが、  
肝心の愛液が出てこない。

「うーん、乳頭も刺激してみましようか」





吉良先生は藍田の背後に回り込み、  
乳首を摘んだ。

「あぁっ！  
っだ、ダメですっ」

やはり乳首の刺激に  
大きな反応を見せる藍田。



左の指でクリトリスの皮を  
上に引っ張りながら、  
右の指で刺激する。

「あああっ!!  
だめえ・んん、んっっ」



みるみる藍田のクリトリスは充血していき、小さく膨らむ。

剥き出しになった藍田のクリトリスは、ツンと触れるだけでも跳ねるほど敏感だった。

「藍田さん、あんまり動かないで」

藍田はまた吉良先生に注意を受ける。堪えるように顔を真っ赤にしなが下半身に力を込めた。





上も下も敏感なところを  
重点的に責められる藍田。息も絶え絶えだ。

「松永先生、どうですか？」

俺は藍田の膣口を広げた。

「うーん、  
もう少し……かな」

「あら……緊張かしら？」



俺はクリトリスへの刺激を続けたまま、  
指先で膣口のあたりも優しくマッサージする。  
すると徐々に湿ってきた。

少しずつ指先を膣口に侵入させていく。

「あ……うっ、んっ……んんっ」

「藍田、力いれすぎだ。  
もっと力を抜いてリラックス」



動くなと言われたり、力を抜けと言われたり。  
藍田は戸惑いながらも  
注文のとおり努めて見せた。

さっきよりも脱力した藍田のおま○こに  
指先がゆっくりと侵入していく。

第一関節が入りきったところで  
優しく指先を動かして刺激する。





「リラックスしましょうね」

吉良先生も緩急をつけながら  
おっぱい全体を包み込むように揉んだり、

敏感に勃起している  
乳首を弾いたり。

「はぁ、んん……あっう……」



藍田の陰唇のヒクヒクが大きくなり、俺の指をどんどん飲み込んでいく。

ついに第二関節まで入り、藍田の中の体温がゴム手袋越しに感じられる。

「藍田、痛くないか？」

「……んん、はああっ、はい……っ」



第二関節まで入った指を  
ゆっくりねっとり動かす。

処女のおま○こだ。  
慎重すぎるくらいでちょうどいいだろう。

休んでいた方の指で、  
クリトリスへの刺激を再開する。





「あっ……」

敏感な乳首とクリトリスと、  
中を同時に責められた藍田は  
また身体をこわばらせる。

指もぐつと締め付けられる。

「……っだ、だめです……」

「力抜いて、藍田」



そう言いながら、  
締め付けられた指を前後にピストンさせる。

「ああ…んん…っ、だめえ」

「ああっんっ…ああっ」

切ない吐息を漏らしながら  
力が抜けなくなってしまうた藍田。  
全身ギューっと強張らせる。

そして…





「あ……！ あああ……っっ!!!」



「…っ!! …っ、っ!!」

静かに唇を噛み締めながら、  
おま〇こを痙攣させる藍田。

ぎゅーっぎゅーっ  
俺の指を締め付けてくる。



おまんこの締め付けが収まると、俺はゆっくりと指を引き抜いた。

透明の糸が引き、  
続けて、ぬぷっと大量の粘液が溢れ出した。  
肛門の方まで伝う。

「どうかしら？」

吉良先生も乳首への刺激を止めると、  
藍田の愛液を確認にしにきた。



「うん、いいでしょう。」

無色透明。粘性もしっかりあって  
量もたくさん出たわね」

そう言いながら吉良先生は  
クリップボードに記録している。

放心状態で、なおも律儀におま○こを  
広げている藍田。  
俺はティッシュで愛液を拭き取る。





「ああ……だめえ……」

いった後の陰核は特に敏感だ。

再びぎゅっと力を入れる藍田。  
ちよろちよると漏れ出してしまう。



「あらあら」

堪えきれず、藍田は少しだけ  
お漏らししてしまったようだ。

「うーん。いいわ、ここにきて」

吉良先生は透明のカップを藍田にあてがった。

顔を真っ赤に躊躇しながら、  
でも我慢できずにちよろちよろと  
お漏らししてしまう藍田。



「ほら全部出していいのよ」

「……っ」

吉良先生は藍田の下腹部を  
手のひらで押した。

「ああっ！」

シャー！と

勢いよく溢れ出す藍田のおしっこ。





一度出てきてしまったおしっこを、  
藍田はとうとう堪えられなかった。

ジヨロジヨロと音を立てながら  
コップいっぱいに溜まっていく。

「たくさん出たわねえ。我慢していたの？  
溢れるところだったわ」



「でもちょうどよかった。  
おしっこの観察も  
するつもりだったのよ」

「色は明るい黄色。  
匂いも・・・少しあるわね」



絶頂を迎えた上、  
お漏らしまでしてしまった藍田は  
恥ずかしそうに目を逸らすばかりだった。





「さ、ついに最後まで来たわよ。

肛門の感覚検査をして終わりになります」

「……」

肛門……

本当に身体の隅々までチェックするんだな。

「四つん這いになりましたよね」

もう排尿など恥ずかしいところを思い切り  
見られてしまっている藍田は、大人しく従った。

「観察しやすいように、お尻を高く上げて、  
足を開いて」



吉良先生に言われるがまま、  
恐る恐る言われた通りの体勢になる藍田。

肛門も、おま○こも思い切り突き出し、  
迫力さえ感じられる体勢。





「ではこの検査でも毛筆を使って、  
感覚が正常かどうか判断します」

「少しくすぐったいかもしれませんが、  
リラックスしていてね」

「はい・・・」



「触れられたと思ったら、教えてね。  
では松永先生、お願いします」

俺は吉良先生から手渡された毛筆を  
藍田の肛門の前に構える。

「…はい」

藍田は目を閉じ、  
その感覚に集中しようとしている様子だった。



「…っ！」

慎重にゆっくりと筆の先の先の方で、  
軽く藍田の肛門に触れると、

藍田はお尻を跳ね、すぐさま反応した。





「……か、感じました」

「いいわね。気づくのも早かったし。  
もう一回やってみましょう。  
今度はお尻の周りを何周したか  
答えてみましょう」





何周・・・  
お尻の穴の周りを  
くるっとなぞればいいのか？

俺は藍田が数えやすいように筆の先で  
円を描くようにゆっくりと触れていった。  
一周、二周、三周・・・。

「ああっ」

藍田はくすぐったさに堪らずお尻を  
キュッと閉じてしまった。

「ダメよ、お尻を開いていないと。  
ぐっと力を入れて開いてごらん」

藍田はキュッと閉じていたお尻を  
少しだけ緩める。





「もっと。うんちをする時のように、  
んーっとお尻の穴に力を入れてごらん」

「そ、そんな・・・」

「できるはずよ？ だって、普段どうしているの」

「……………」

藍田はゆっくりとお尻の穴に力を込めた。  
キュツと閉まっていた肛門がじわっと  
横に広がってくる



「さあ、もう一度」

俺は力んで膨らんだ藍田の肛門に筆を触れた。

一周、二周、三周……



「ん、んん……ひゃあっ」

頑張っただけで堪えていたのだが、三周目で藍田は  
また肛門をキュッと引っ込めてしまった。

「……やり直し」





A close-up illustration of a person's buttocks. A hand is holding a red pen with a silver clip, touching the tip of the pen to the skin near the anus. The skin is rendered with soft shading and highlights, giving it a realistic, fleshy appearance. The background is a simple, light blue-grey gradient.

藍田が肛門を広げ、俺が筆でくすぐり、  
くすぐったさに堪らず引っ込める。

また肛門を広げ、くすぐり、  
キュツと引っ込める。

これを何度か繰り返すこととなった。



「……っ」

どうしてもお尻を窄めてしまう藍田。

「くすぐったがりなのね」

見かねた吉良先生は藍田の尻たぶに  
両手を添えた。

「あっ……！」

吉良先生は藍田の尻たぶを  
思い切り左右に広げてしまった。

「さあ、これでできるでしょう」





思い切り横に引っ張られ、  
横長に変形した藍田の肛門の周りを、  
筆でなぞる。  
筆先が触れるたびにおま○こが  
ヒクヒク動くのが面白くて、  
つい四周、五周、六周と続けてしまう。



そして最後に、  
もう一周。

「……っ」

「はい、今何周  
だったか分かる？」

「ご、ごめんなさい……  
わからなくなっちゃいました……」

藍田は消え入りそうな声でそう言った。

「やり直し。もう、次で最後だからね」



もう一度筆先を構える。

藍田は目を閉じて、  
再びお尻の穴の感覚に神経を注いでいる。

敏感な肛門を広げられながら、  
肛門周り7周分の刺激に  
耐えなければならぬ藍田。





一周、二周、三周…  
おれはゆっくりと時間をかけた。

おま○こもアナルもヒクヒクさせながら、  
藍田はなんとか刺激に耐え切った。



「・・・7周、です」

「正解」



肛門の感覚検査も終わり、  
藍田が少しほっとした様子を見せている。

が、しかし吉良先生は再び防水シートを  
敷いたり、何か準備をしているようだ。

あれ、さっき最後だって言っていたような…

そんな空気を察したかのように  
吉良先生はこちらに向き直って言った。

「もうこれで最後よ。

四つん這いになってね」

楽な体勢に直っていた藍田だったが、  
もう一度四つん這いにさせられる。



不安げな  
表情で  
視線を落とす  
藍田。

吉良先生は  
藍田のお尻に  
近づいた。

「力を抜いていてね」





吉良先生が  
手にしているのは……  
イチジク型の  
プラスチック容器。

吉良先生は慎重に  
容器の先を  
藍田の肛門に  
挿入した。

「……えっ  
あっ……  
いやっ……」

藍田が顔を歪める。

吉良先生は  
容器の中の液体を  
ゆっくり  
注入していった。





「はい、これが最後の検査です。

今、藍田さんのお尻に浣腸液を入れました」

「か、か、浣腸……」

藍田の顔に陰りが差す。



「2、3分もすれば便意が起こります。

便意を催した状態で  
肛門周りの感覚が正常に  
機能するかの検査になります」

「そ……そんな……」

な、なんて破廉恥な検査だろう。

藍田は言葉を失い、絶望的な表情をしている。





嫌だと言ったところで、今更遅い。  
もう浣腸液は注入されてしまったのだ。

「少し不快かも  
しれませんが、  
頑張りましょうね」

吉良先生は  
穏やかにそう言うが、  
少しなんてもんじゃない。

下痢を我慢するのは  
ただでさえ辛いもののに、  
無理やり浣腸液で腸壁を  
刺激するのだから。





そうこうしている間に  
藍田は顔を赤らめて身体を揺らし、  
落ち着きがなくなってきた。

「そろそろかな？」

「……」

藍田は真っ赤な顔で  
頷いた。



「では、さっきのように  
松永先生には  
肛門周りを  
円を描くように  
刺激してもらいます。  
便意が高まるにつれて、  
感覚がどのように変わるか、  
教えてくださいね」

「……………」



「あっ……っ」

筆先が触れると、  
藍田はお尻の穴をキュッと閉じた。

「あ、お尻の穴はできるだけ  
開いていてね」

吉良先生は、  
便意を堪える人間に対する  
最も無茶な要求を言っただけだ。







俺は再び肛門に触れた。

「…あ、はあ…っ」

藍田は1秒くらいは堪えたものの、  
すぐにお尻をキュッと閉じた。

俺は構わず刺激を続ける。

「ああ……あ、だめ……っ」

「藍田さん、どうですか？  
筆の感覚は？」

「ダメですっ……漏れちゃいますっ……!!」

「漏らしたらダメよ、感覚の検査が  
目的だからね。お尻の穴の感覚はどうなの？」

「……っ！あっ、んん、ああっ……っ」



もうすぐそこまできている便を  
必死に押さえ込もうとする藍田の肛門。

しかし左右にガッチリ広げられた上で、  
筆でくすぐられ、  
ちよつとでも気を緩めたら、  
悲惨な結末を迎えることになる。





「もう、限界です……！」

「まだ大丈夫。どう？感覚は？」

「トイレに……行かせてください……っ」

「トイレって言ったって……  
その格好で行くつもり？」



藍田はまた絶望の表情を浮かべた。

吉良先生は着替えなどを

手伝う気配もなければ、

バスタオルを用意するでもない。

よく考えたら一番近いトイレまで  
それなりの距離がある。

気の毒だが、

藍田はもう諦めるしかなさそうだ。

全裸のまま吉良先生に

浣腸液を注入されてしまった瞬間から、

ここで排便することは

決まっていたようなものだ。



藍田の肛門は膨らんだり引っ込んだり  
収縮を繰り返している。  
当然それに合わせておま○こもヒクヒクする。  
だんだんそのスピードも早くなってきた。





俺はひたすら筆先で藍田の肛門を撫で続けた。

「どうだ？ 感覚は」

「…っ、っも、もう感じません…  
それより、もう、…もう無理ですっ！」

「筆の刺激は感じなくなったのね、  
わかったわ。検査は無事終了よ」



俺は筆の刺激をやめた。

深呼吸を繰り返しながら、太ももを小刻みに震わせ、手を強く握りしめる藍田の姿は、まさに限界を迎えているようだった。

「いいわ。シートをたくさん敷いたから、  
ここにして大丈夫よ」

ポリマー素材の使い捨てシートを  
万全に敷いた。

しかしやはり藍田は  
肛門をギュッと閉じてしまった。





「もう我慢しなくて大丈夫だよ」

俺は藍田のお腹をさすった。

「…あつ、う…だめ…」

「大丈夫だから、ほら、全部だしな」

俺はゆっくり円を描くように  
お腹をマッサージする。

藍田は必死に耐えようとしたが、

もうとっくに限界は過ぎている。  
肛門が収縮と拡張を繰り返す中…





「あああ……!!  
せんせい、だめえ  
ほんとに  
出ちゃう……からっ」

「いいよ、出しな」

「ああだめえ……っ  
み、見ないでええ……  
……っ!!」





「あぁっ……  
あっ……っ!!」

ブピュップツ…ツ！  
ブピ、  
ブウープツ…





ブリュ・…ツ  
ブ、ブウウーッ



ついに決壊。

藍田は真っ赤な顔に涙を浮かべながら、  
シーツに失禁し始めた。

「う……うう……み、みないでえっ！」

ブピュッブツ……ッ

ブピ、ブウウー……ブツ……



静かな部屋に響く藍田の排泄音。  
一度出始めると、もう止められない。

藍田は整った顔を大きく歪めながら、  
最も人前で晒したくない姿を晒している。

「あらあら」

「……………」





藍田は消え入りそうな声でごめんなさい、  
とそう言ったようだった。

「いいのよ、  
むしろここまでよく頑張ってくれたわ。  
全部出して、スッキリしましょう」

俺はお腹のマッサージを続け、  
吉良先生と共に藍田の排泄シーンを  
最後まで見守った。





あれから、数ヶ月が経った。

あの後、吉良先生に他の生徒の検査も手伝うように言われたけど、さすがに断った。

「え？あなただって良い思いをできたでしょう？」

なんて驚いていたけど、

俺をなんだと思ってるんだ・・・

とにかく、これ以上巻き込まれるのは勘弁だ。

それから吉良先生は何人かの生徒に対して、あの検査を一人でやったらしい。

最後までやり遂げたのは結局、藍田だけだったみたいだが。

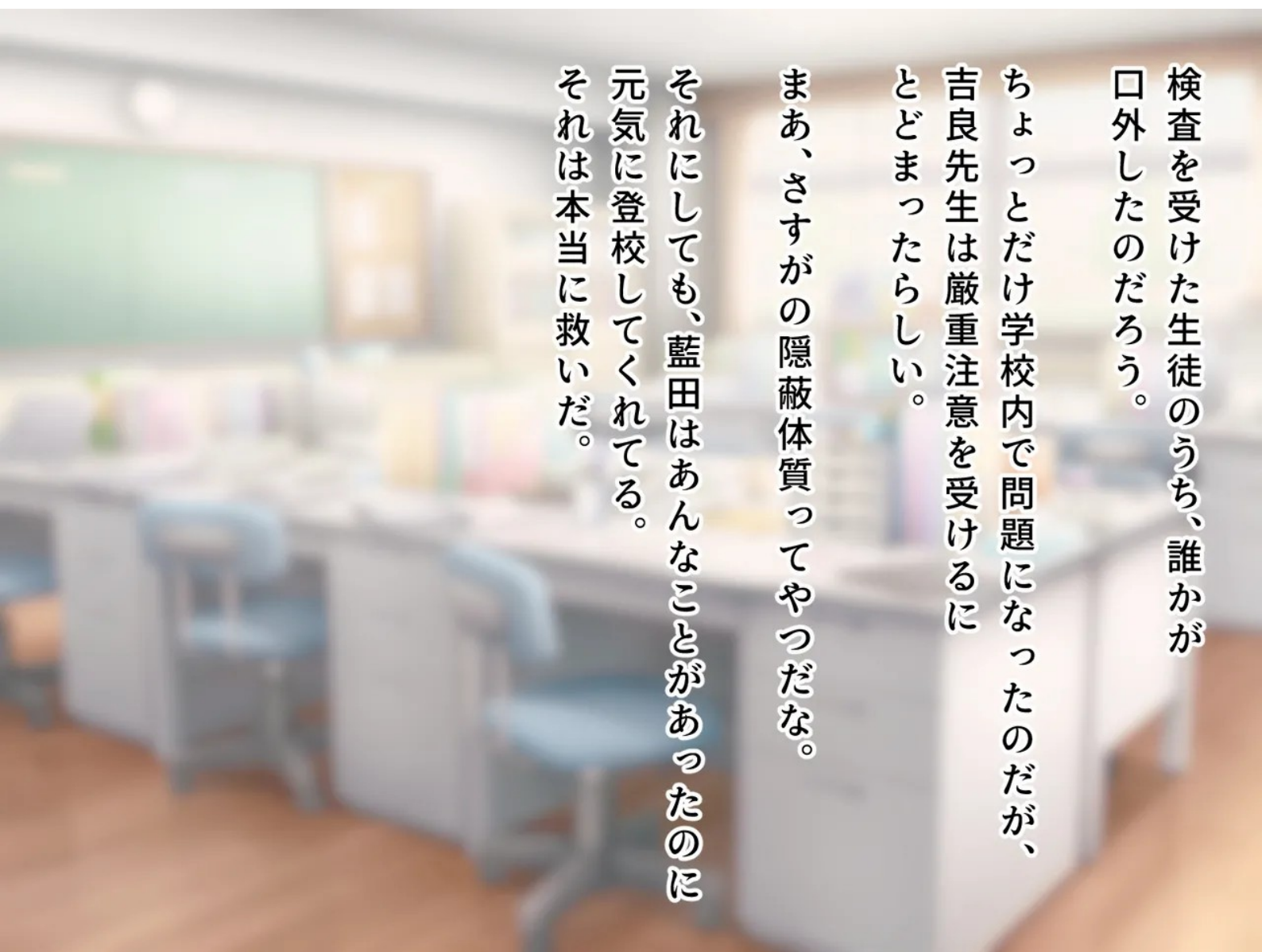


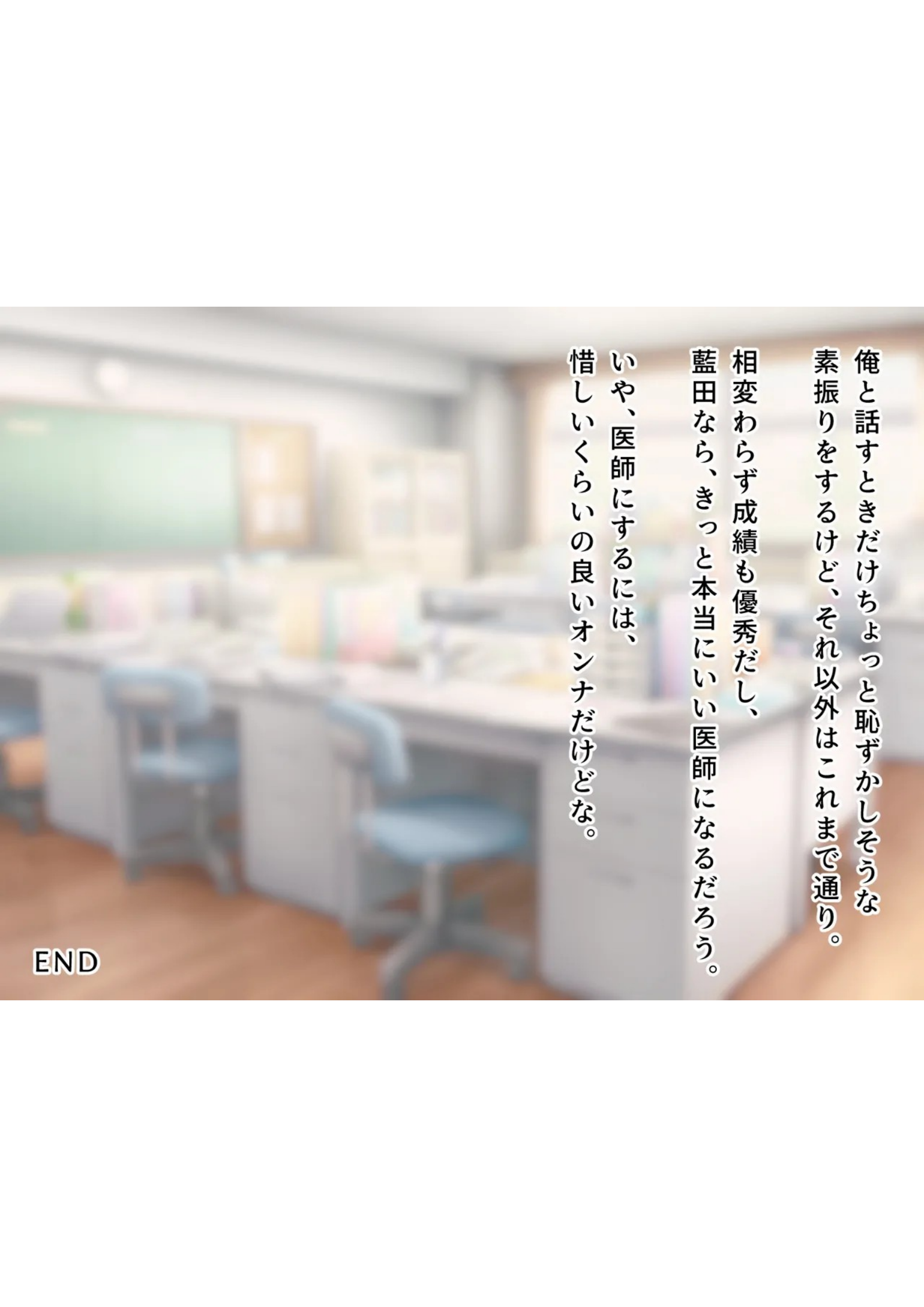
検査を受けた生徒のうち、誰かが口外したのだろう。

ちよつとだけ学校内で問題になったのだが、吉良先生は嚴重注意を受けるにとどまったらしい。

まあ、さすがの隠蔽体質ってやつだな。

それにしても、藍田はあんなことがあったのに元気に登校してくれてる。それは本当に救いだ。





俺と話するときだけちよっと恥ずかしそうな  
素振りをするけど、それ以外はこれまで通り。

相変わらず成績も優秀だし、

藍田なら、きっと本当にいい医師になるだろう。

いや、医師にするには、

惜しいくらいの良いオンナだけだな。

END